

中田一会さんに聞いてみる！

「家を継ぎ接ぐ」で考えたこと

Ask Kazue Nakata about ‘Things I thought through “Patching a Home”’

東京で生まれ育った「わたし」が、
 祖父母の遺した千葉の一軒家に移住することから始まったドキュメント・エッセイ『家を継ぎ接ぐ（つぎはぐ）』。
 その筆者であり、広報コミュニケーションプランナーでもある中田一会さんは、
 気づけば多様な人が訪れるようになったその家の珍妙な生活を通して、
 家や暮らし、家族や人との関係性について考えたといいます。
 そんな「わたし」と「家」をめぐる物語と、それらを同じような状況にある「わたしたち」と共有していく方法についてうかがいました。

Born and raised in Tokyo, Kazue Nakata created a documentary essay entitled “Ie wo Tsugi Hagu -Patching a Home”, which began with her relocation to her grandparents home in Chiba. In addition to being an author, Ms. Nakata is a public relations communication planner. She thought about the house, life, and the relationship with family and others through the unusual life in her grandparents’ house, a place where a lot of various people visited over the years.. Ms. Nakata told stories about “herself” and “the home” and her approach to life, sharing with those of “us” who are in a similar situation.

ゲスト 中田一会（きてん企画室主宰）

聞き手 ササキユイチ、高木路子、久保田翠（認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ）

Guest: Kazue Nakata (KITEN Planning Office Inc.)

Interviewer: Yuichi Sasaki, Fukiko Takagi, Midori Kubota [Approved Specified Non Profit Organisation Creative Support Let's]

『家を継ぎ接ぐ』とは

中田 広報コミュニケーションという仕事を生業にしています。企画やメディアイベントを通して何か実践している人がなぜそれをやっているのか、届くべき人にどうやったら届くのかを一緒に考えながら情報発信する仕事です。
 一方で、昔からその日の記録を残すことにこだわりがあって、すぐ日記を書くしいつも写真を撮っています。それで、個人がアーカイブ活動を楽しむ「キロク学会」というコミュニティをつくってみたいもしました。今日お話しする『家を継ぎ接ぐ』もそういう私の興味関心からはじまった活動です。
 『家を継ぎ接ぐ』は2019年5月に文庫本を自費出版しましたが、もともとは2017年の7月に母方の祖父母が遺した古い家で暮らそうと思いついた日から、2018年10月までの記録をウェブサイトに残していました。匿名の「だである調」の文章で、1テーマ1記事というルールで15ヶ月で67本の記事を書きました。この記録活動は、《ことのはじまり》というコンセプト文を公開するところからはじまったので、その全文を読み上げます。

2017年夏、32歳も終わりかけの夏。

東京の郊外で生まれ育ち、東京都心で暮らしてきた「わたし」は、ふと、東京から少しだけ離れることにした。移り住む先は、都心からJRで約1時間、千葉の住宅街にある「家」だ。

それは、かつて母方の祖父母一家が暮らしていた場所で、今は空き家となっている築60年弱の一軒家。趣のある古民家でも、リノベーション済みのおしゃれな住宅でもない。やや変わり者の家族の歴史が、たくさん家財とともに生々しく残る、きちんと歳を重ねた感じの昭和の家だ。

まちにも、特に特徴はない。海も山も緑がない住宅街で、最寄り駅はとても小さい。親しい友人も近くに住んでおらず、家族も一緒ではない（「わた

し」は2年前に離婚していて、子どもなく、親兄弟は離れて暮らしている）。

だけど、「わたし」は、そこでひとり、しばらく暮らすことにした。おそらく2、3年ぐらい。オリンピックの騒がしさが過ぎ去るまで。新しい仕事づくりが落ち着くまで。この人生の曖昧な継ぎ目の期間を「家」で暮らしたい。増改築の跡がくっきり残る、継ぎ接ぎだらけの家の寿命を、あと少しだけ延命するべく自分が住む。「家」と「わたし」がお互いの接着剤になるようなつもりで。

ひとまず始めてみようと思いをいれて記録をここに残すことにした。

とても個人的な話で、とても私的なプロジェクトだけど、なんとなく、きっと、同じようなことにつまずき、悩み、救われ、考えている、同じような「わたし」と「家」が日本には点在している予感がするので。

2017年7月31日。

このコンセプト文の下には、記録を始める上で考えていきたいことをリスト化して掲載しています。第一に、「家」というと、物件だったり、家族だったり、家制度のことも指しますが、それと「わたし」の気持ちいい状態ってなんだろうと。次に、この記録には「わたしたち」という言葉が何度も出てくるのですが、「わたし」に連なる「わたし」と同じような状況にある人たちを「わたしたち」と呼べるとしたら、そういう人たちに届けたいなと考えました。それから、私は東京の郊外生まれで当時都内で働いてたので、東京という場所を改めて眺めてみようと思いました。あとは、リアリティ、生々しさを大事にしようと。ライフスタイルを提示するとかキラキラした移住生活を見せるのではなくて、ちゃんと暮らすことを見せたいと考えました。



この家の最寄り駅はJR総武線のとある各駅停車の駅です。空がとても広い。子どもの頃から夏休みに通っていたのですが、30年たった今も変わらず開発されていない。駅から8分歩くと、日本中どこにでもあるような住宅街の中にその家があります。いわゆる趣のある「古民家」でもなく、昭和の時代に建てられ、増改築を繰り返してきたような継ぎ接ぎだらけの家です。住み始める前に覗きに行ったときには、お土産や家具がいっぱいあって、遺影もあれば祖母の書道もあって、生活の匂いがしっかりするような感じでした。祖母が亡くなってから5年間空き家でした。叔父たちが風通しや片付けをしたり、法事の拠点になったりはしていたのですが。

ここからは、なぜ『家を継ぎ接ぐ』を始めたのか、やってみて何が起きたのか、そのあいだに何を考えたのか、そしてこれからについてお話ししたいと思います。

プロジェクトをはじめた経緯

中田 では、最初になぜ始めたのか。それが伝わるように『家を継ぎ接ぐ』の7月～9月の記事の中から一行ずつ抜粋して構成してみたので読み上げます。

ことなりゆき。／私は数年前に1回家庭生活から逃げてその家で過ごしたことがある。／条件を聞かれたのでとにかく家族の匂いがしない賑やかな街がいい、と答え勧められたのがこの街だ。／東京は高いねとため息をついた。本当にそう、ちょっと無理。無理すればいけなくもないんだけど、その無理が無理。大事なことを失う気がする。／地縁と血縁が苦手だ。が、次の暮らしはそうはいかない。／そういうことは世間では普通じゃないから言わないほうがいいと女性としての人生観について女性から指摘を受けたことがあった。／あれから3年、まさか長く住むとは思わなかった。ここは仮住まいで最初の2年で次の生き方をバシッと決め移動するつもりだったのに。／昔の過敏な私だったらきつと気持ち悪くてたえられなかったのに、今はそのほうが落ち着く予感がする。

『家を継ぎ接ぐ』を書き始めたのは2017年7月ですが、引っ越したのは9月末で、あいだの2ヶ月間は家族や暮らしのことについてひたすら綴っていました。私は20代のほとんどを一緒に過ごしてきた男性と27歳で入籍して、別居を経て31歳で離婚が成立しました。つまり、バツイチの独身です。いわゆる共働き世帯であれば、収入的に東京のいろんな場所や家で暮らせる可能性もあったでしょう。でも、自分一人になってみると東京には住む場所の選択肢が少ない。払える家賃を基準に考えると住める街が限定されてしまったり、学生が住むようなアパートぐらいしか見つからなかったり。同時に、家族という共同体についても昔から引っかかりがあるので、なかなか同世代で話せる相手がいないなと思っていたのがこの時期です。「結婚」や「出産」って30代の女性にとってはとても繊細な話題で、

価値観もそれぞれなので。だったら、家のことも家族のことも、女性としての人生観も正直に言葉にすることによって、話せる相手や仲間を探そうかなと思ったのが、『家を継ぎ接ぐ』をはじめた理由です。

祖父母が遺した一軒家での珍妙な暮らし

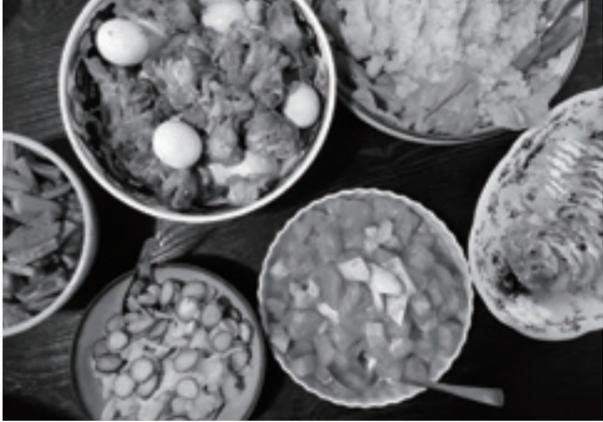
中田 『家を継ぎ接ぐ』は匿名の記事とはいえ、Facebookでシェアしていたので、親戚、友人、仕事相手にも私が書いていることは知られていました。すると、仕事で一度しか挨拶したことのない年下の作家の男性が「Facebookにあげていた家、次いつ行かれますか、僕も一緒にできせんか」と声をかけてきました。彼は昭和に撮られたスナップ写真をリサーチをしていて、祖父母のアルバムがいっぱいあるその家を面白がっていた。彼がそう言ってくれたことがきっかけで、家に人を招き入れることや家の話を公開していくことにだんだん慣れていきました。他にも仕事仲間が面白がって、「中田さんちに視察ツアーに行こうよ」と車を出してくれて、引越し前からみんなで行って雨漏りの確認をしたり、「扉を外したら使えるね」というようなことを一緒に話し合ってくれたり。予備校時代の先生で、映像作家の方が「ドキュメント映像を撮ってみたい」と、10年ぶりに連絡をくれて撮影にやってきましたりもしました。

逆に、「うちの家が面白いから遊びに来ない？」と誘ってくれる人も現れました。それは友達のお母さんだったのですが、その人の夫が65歳を過ぎて一人暮らしをしてみたいと言いだして、神楽坂の中古マンションで突然一人暮らしを始めたんです。趣味のものがいっぱい詰まった家で、「妻としては腹が立つんだけど、暮らしとしては面白いから見に行こうよ」と。そのご夫婦に、『家を継ぎ接ぐ』の話をする、「うちもそういうことがあってね」と話題が広がって面白かったです。

祖父母の家への引っ越しで、キーマンになったのは近くに暮らす伯父でした。彼は市内の公立高校で教頭先生をやっていたので、地域の人からの信頼が厚くて。女一人で一軒家に住む怪しさを緩和するために伯父の信頼感を使おうと、一緒に挨拶回りしてもらいました。このあたりは意外と近所付き合いがあって、お向かいさんからお土産をいただいたり、庭で何かしていると通りすがりの人にも声をかけられます。祖父母や伯父の付き合いがそのまま継承されているのが、いま私がこの地域で住める理由ののかなと考えています。

いよいよ引っ越しするときには、空間デザイナーの友人が手伝ってくれました。リノベーションとかおしゃれな家具を入れるのはやめて、まずは壊れたものを直して、不要なものは片付け、使えるものは再活用しようと提案してくれて、一週間くらいかけて片付けを手伝ってもらいました。お掃除期間の最終日には、友人を呼んでご飯を囲みました。＜掃除修繕模様替え、そして来客。今わたしが暮らし始めた家はちょっとへんでこで楽しい姿になり呼吸をし始めた＞ですね。カーテンやカーベットを外すことでも、人を招くことによっても、家の感じは変わっていくなと思いました。

あと、私が祖父母宅に住む決意をしたことで、3歳年下の弟が掃除の手伝いに来てくれました。それも1週間の住み込みで。最初は「よくこんな都心から離れた古い家に住もうと思ったね」と言われたんですが、片付けが終わってみんなが来たら、「いい家だな。うらやましいな」と言い出して。《なんだここ居心地いいなあと帰り際に名残惜しそうに言い残した彼に姉はニヤリとした》という。その後、「実はアパートの更新期間だし、新しいことに挑戦したくて家賃を下げたいから、あの家で一緒に住まわせてくれないか」と連絡が来て、まさかの弟と一緒に暮らすことになりました。そんな



流れで、十年近く疎遠だった彼と今も共同生活を送っています。

そして、いざ千葉で暮らし始めると、近所の方が「誰が帰ってきたんだろう」と挨拶に来てくれたりしました。高齢の方が多い地域なので「人が住んでくれるだけで嬉しいよ。どんどん騒いでいいから!」と言ってくださる方もいました。私は、自分がここで暮らすのは迷惑じゃないかなと思っていたくらいなので、嬉しかったです。そういう考え方もあるんだと。

我が家では年1回、芋煮会をやるんです。「一度来れば遠いと思っていた場所も近く感じるから」という友人の提案で、30人ぐらいが一気に集まる日を設けているんです。《15ヶ月の間に家は姿を変え、様々な人が訪れ暮らしの場所としてすっかり安定した。時々事務所になったり合宿所になったり宴会会場になったりもする》というわけで、芋煮会以外でも、月に1回くらい誰かしらが来ていますね。私が企画せずとも、「中田さんだったらなんでもできるから泊まりに行こう」とか「ご飯会やろう」という感じで。記録をとり、ウェブ上で記事を書いているうちに、少しにぎやかで珍妙な暮らしになっていきました。

生き方の観察とつくる力の練習

中田 なぜこんな暮らしになったかと考えると、《東京のスピードはちょっとも届かず父の田舎ほどの共同体感もなく、かといって郊外の主役である家庭生活はここにはない》と書いたように、両親と暮らす家でも夫婦で暮らす家でもないし、弟がいることで女一人の家に押しかける感じにもならない、いい塩梅で自由にできる場所になっているからかなと思います。ということはつまり、いわゆる普通の「家族の家」の使い方ではないということなんです。昔から私はなぜだかちょっと人と「ずれる」ところがあって。そんな自分の生き方の癖を自ら観察しようというのが、『家を継ぎ接ぐ』だったのかなと思います。

だから記事でも、自分の性分やこれまでの人生に触れています。《わたしはずっと友達をつくるのが下手だった。人付き合いの当たり前がよくわからなかった。》と書いたのですが、広報職をやっているというコミュニケーションブなイメージがあると思うんですが、私はもともとすごく人付き合いができなかったんです。克服しようとして右往左往しているうちに、人と付き合う方法を見つけてそれが仕事になった。そんなことにも気づきました。

これは両親が法事で家に泊まることになった日の記録なんです。《そこはわたしの苦手な色合いがしている。息が苦しい。前の珍妙な誰のための器でもないようなそういう場所に早く家をリセットしなくては》と。姉弟暮らしをしている時間は珍妙な家としてあったのが、両親と子どもが揃ってしまうと、急に生活感があってルールがはっきりした場所に戻ってしまったような気がしたんです。なぜそれがしんどいのかということ、この日からずっと考えています。じゃあ一人で気ままに生きたいというわけでもなくて、日々誰かと暮らす意味はとて大きいと思っていて、《恐怖や危機感すら共振先や守る人がいないと鈍るのだ。「ねえ、このニュースさ」

という相手は人間らしさを保つために必要だなあと切実に思う》と。とはいえ誰かとパートナーシップを組むのは、惑星を探すみたいに難しいなあと思う日もあります。誰とどこでどうやって暮らすのかは、私にとっていつも難しいことです。

それでも、この家で暮らしてから、友人知人との関係には大きな変化がありました。来た人は「物理的に距離が遠いから相談ができるようになった」とか、「またエスケープしにくるね」と言ってくれます。空き家だった頃、母がこの家を「みんなの避難所」と呼んでいたんですが、まさにそんな感じ。しかし避難所で暮らし続ける私自身は何から避難しているんだろう。誰かの避難を受け入れ続ける私はなんなんだろうとも考えたりして。そんなことにモヤモヤしていたら、弟にこんなことを言われました。《なんかさ、こう浮くんだよね、自分。周りの人たちから。本当に物心ついた頃からそうでわりと社交的にしているつもりなんだけどな、気がつくとな変わったやつって扱われて大縄跳びの外にいる感じ》と。ああ、私たち姉弟はもしかして浮きやすい姉弟なのかなと思って。私は私でなんだかなんか浮いてるなと思いながら住んで、同居している弟も同じようなことを考えていて、だからいくら二人で暮らしても、いわゆる生活感もなければ安心感もないというか。

そうして我が家やいよいよ駆け込み寺のようになってきました。連休になると大学の後輩や昔の職場の同僚が来て、平気で10時間とかしゃべり続けるんですが、そのうちだいたいみんな泣くんですよ。人生のこと、家族のこと、恋愛のことで泣く。それにつられて私も泣く。でも、なんの解決もしてあげられないので、「そうだね」と言って終わるんですけど。それは、《「わたし」の話を外気にさらしていくと「わたしたち」の話になっていく》ということのかなと思っています。《話は話を引き寄せ生き物のように増殖して私の小さな話ものまれていく》とも書きましたが、自分の話を書くと、「それ、私のことかも」と思った人が来て同じような話をする。でも、それによって寂しくなるわけじゃなくて、寂しい人が集まるだけなんです。けど、たくさんの寂しさが集まることによって私の寂しさが別の寂しさの中に埋まれる。それは回復するのとは違う。けど、寂しくても大丈夫と思えるくらいささやかな効能はある。『家を継ぎ接ぐ』を続けながら、《なんでもない日常を見て、感じ、考え、書くそれをぐるぐるぐる繰り返していたら、いつの間にか日常の解像度が上がっていた》。あそこの花が咲いたなと気づくことだったり、自分の感情に前よりも丁寧に向き合えることだったり。

私は何を得たくて『家を継ぎ接ぐ』を綴ってきたのか。《わたしたち世代の新しいものは祖父たちの世代とは少し違う。戦後ガンガン生産されたあらゆるものと仕組みを見直し、解体し、仕立て直し、賢く使う。そういうつくる力が今わたしは欲しい》と書いた日があります。祖父母の世代が戦後一生懸命働いて、子どもを育ててということをした結果、5人家族の器としての家がちゃんが残っている。私自身はそこを使わせてもらっている立場なんです。祖父母と同じように家族を持ってしっかり稼いで新築一軒家を建てて……という暮らしは、今の時代を生きる自分にはそんなに向いているとは思えない。だから、あるものを使わせてもらって、そこから新しいものをつくれるようになったらいいと思うし、『家を継ぎ接ぐ』はつくる力の練習なのかなと今では思っています。

『家を継ぎ接ぐ』の終了とこれから

中田 2017年9月から暮らしはじめて、この9月が来れば丸2年住んだことになります。もともとこの家は、2020年になったら更地にして売った分を下

の世代に渡そうと親族が言ってきた場所なんです。なので私たち姉弟もそれまで使わせてもらおうと思っていたんですが、最近になってちょっと考えが代わりました。

この『家を継ぎ接ぐ』を15ヶ月でやめたのは、ずっと続けていくと、生活を記録しているはずなのに記録のために生活してしまいそうな気がして、それは違うからやめようと思ったんです。ただ、ここまで書いたなら何か落とし前をつけようと思って、友人知人を巻き込んでウェブサイトの記事を232ページの本にまとめて、一部売ったり大事な人に渡したりしています。一人の人が住み暮らした15ヶ月の話が誰かの本棚に残っていて、何年後かに知らない人が読むのだったら面白いし、別の「わたしたち」に出会えるかなと思っています。そうして今、合計100冊ぐらいが、誰かの手元に渡ってます。



それで、家については最近、建て替えようかなと思いはじめています。今の状態だとあと10年ぐらいは延命できるけれど、30年先まで住むのは物理的に難しい。かといって更地にするのもったいない。それに親族でもあの家を建て替えて引き継ぐと言う人は誰もいないので、私がやってもいいのかなと。ここまで関わってしまったし、地域にも愛着が湧いてきて定住してもいいかなと思えるようになったので。なので『家を継ぎ接ぐ』の更新は止めたんですが、『巣をつくる』というウェブサイトをたてて、新しい記録を取り始めています。家ってまず家族とかパートナーシップがあってからそれに合わせてつくっていくものかと思うんです。でも、それが無い私がこの先どこで誰とどうやって暮らしていくのかをイメージしながら、どうあっても暮らせる場所とか、明日私が違うところにも誰かに預けられる家の設計を考えるとどうなるのか見てみたい。そして、都会に暮らしているけれど、へその緒のようにつながっている物件が地方にある人は意外といるので、そういう家や暮らしにお邪魔させてもらってその物語も残していきたい。そうやって話を共有することで、家や家族、暮らしについて周囲の人ともっと考えることができるんじゃないかなと思っています。私が次の誰かに何か渡せるとしたら、そういうことかなと。

DISCUSSION

高木 たけしと生活研究会は、もともと重度知的障害者の一人暮らしがテーマですが、今回は、暮らしという普遍的なテーマについて紐解く回になったと思います。私自身、レッツのスタッフの先輩と家をシェアしていますが、当初は、家族以外の人と住んだり誰かを家に呼び込むって、他人同士で新たな家族をつくるイメージがあって、私には無理かもと思ってたんです。でも、実際シェアしてみたのは、「わたしたち」とは言って

も属性の違う人が集まるということ。徒党を組むのも大きなものを強い意味で共有するグループでもなく、プライベートを全部晒すわけでもなく、ちょっとした感情を共有したり同じことをしてみたりする。それだけで、今寂しいと思っている人が少し楽になるのではないかなと思いました。

ご家族が来た時にルールが発生して居づらかったという話をされていましたが、誰かが来たときのルールはありますか。

中田 「家を開いてるね」とよく言われるのですが、実は逆で、適切に閉じていると思っています。心地よい距離感でお互いがいるために、踏み込まれたら困る空間を設定するとか、誰でも招くようにはしないとか、家の外観の写真はウェブに載せないとか。来た人にルールとして明示はしないんですけど、私の心の中にちょっとした決めごとはあります。

ちなみに弟との暮らしは家族暮らしというより、シェアハウスというか独身寮状態です。高木さんのおっしゃるように、私も経験上、人は簡単に家族になんてなれないし、婚姻関係を結んでいてもやっぱり個人と個人だなと思うことが多かったです。「共に暮らす」って、物理的に一緒に暮らしているだけでは叶わないですよ。

久保田 私は結婚して子どもが生まれて、いわゆる家族をつくって、30年近く一緒に住んできましたが、家族の大変さをつくづく感じています。なぜかという時々ふっと離れるとか、関係が変わることがほとんどないですよ。親子、ましてや障害のある子どもだから、同じような関係性から一歩も外に出ていけない。それってしんどいなと思うし、彼がそれを望んでいるならまだしも、望んでいるかもわからない。望んでないんじゃないかとすら思う。ちょっと離れてみたいという思いは強くあるけれど、現実的には重度障害者だからできなくて。だから思い切って彼の住まいを考えてみようと思ったんです。でも、薄々わかっていたんですけど、「たけしと生活研究会」というのは自分のこれからを考える機会なんだろうと。

うかがってみたいのは、中田さんはオーソドックスな家族に対してどう思っているのかということ。それから、これから巣づくりを始めるというのは意外だったんですよ。そこから離れたい、風通しのいい関係性を築きたいと思っていたのに、ローン組んで家を建てるという、束縛される方向に飛び込もうと思った心境の変化を聞いてみたいです。

中田 オーソドックスな家族が絶対嫌だと思っているわけでも、パートナーシップを組みたくないと思っているわけでもないんですが、なぜだかいつもそこからずれるんです……。『家を継ぎ接ぐ』的暮らしを選ぶ時点でいわゆる一般的な家族生活ができるのかどうかともあやしいですよ。嫌じゃないんだけど「家族、絶対必要!」とは思っていないのかも。だから、誰とでもどうとでも暮らせるような状態をつくれたらいいかなと思います。

巣づくりを始めようと思ったのは、ローンを返すのって目標が明確なので、中だるみしそうな30代後半を頑張れるかもと思ったからです。わたし、そういうプレッシャー、好きなんです(笑)。あと、自分でリスクをとって場をつくるということは、空間のオーナー権を持ちたいと思ったから。自分の空間で誰とどう暮らしてもいいんだというメッセージを形にしてみたい。私が苦手だと思っていた家や定住の形も、一から建てれば変えられる、試せるんじゃないかと考えています。

ササキ 『家を継ぎ接ぐ』でやってきたことや『巣をつくる』でやろうとさ

れていることって、生活の中に現場を持つことなのかなと思いました。なおかつ、それを中田さんの職能を使って発信しているのは、ある種の表現のようにも見える。表現と、自分の人生をつくることは不可分だという感覚が僕にはあるからそう思うのかもしれない。

『家を継ぎ接ぐ』にはいろんな人が関わっていますよね。どこまでが意図的でどこまでが想定外だったんですか。

中田 生活の中に現場を持つっていい言葉ですね。それまでは東京の都心で働いていたので、千葉に移り住むと言うと、「あんなにバリバリ働いてきたのに地方で落ち着きたいの？」とややネガティブに受け取る人もいたんです。でも、私は、郊外の普通の家に住み暮らすことが面白そうだし刺激的だと信じていた。その良さを文章で伝えられないならプロ失格だなんて思って、腕試しのような感覚でした。半ば意地ではじめたというか。だから、周囲の人に関心を持ってもらえたのは狙い通りでしたが、こんなに毎月のように人がやってくるのは想定外でした。

久保田 なんでみんな来るんでしょうか。特別呼んでるわけじゃないんですよ。

中田 芋煮会の日だけ自分で企画して人を呼ぶんですが、それ以外は友人知人から「これやりたいから行ってもいい？」とか「行く口実がほしいから何かやって」と。一度来たらすぐには帰れないぐらいには遠いので、長居するんですよね。そうすると愛着がわくのか、2回目以降はより気軽に来られます。

ササキ 避難所というキーワードがありました。中田さんの家にやってくるのはどういう感覚なんですか。

中田 居酒屋とかではできない話も閉鎖空間だと話しやすいんだと思います。私が先に自分の悩みを書いているので、何を話しても拒否されないし論理的な解決も求められないだろうと思うのかもしれない。その感じが避難所っぽいのかな。速くに話を置いて帰ることができるというか。

久保田 たけし文化センター連尺町の3階には、障害のある人たちのシェアハウスと一般の人のゲストハウスを併設しています。障害のある人たちだけが住むのではなくて、スタッフでもない、ふらっとやってくる人が必要だと思ってつくりました。障害のある人たちが集まって住んでいたなら誰も来れない感じがするかもしれないけれど、遊びにくるとか休憩しにくる場所になれたらと思っています。

中田 きっとそうなりますよね。レッツは遠方からいろんな人を呼ばれているから、そのついでに泊まるというのはいい口実ですね。そして、障害のある人と一晩過ごしたり朝起きたら同じ空間にいる状況って、家族や福祉の仕事に就いている人じゃないと経験しないことだと思うんです。でも、一度だけ文でそういう時間を過ごしたら、次からは違う場所でも感覚が変わる気がします。私が今日ここに来ると言ったら、泊まりに行きたいと言う人は周りに何人もいたので、一緒に遊びに来たらいいなと思いました。

ササキ 写真のリサーチをしているアーティストが何回も片付けに来て、家族

アルバムをアーティストの目で見ていくうちに、中田さんよりも家族史に詳しくなっていくというエピソードが、『家を継ぎ接ぐ』に出てきますよね。家族に対して他者の目線が注がれることでそうなっていったのが面白かったです。

それを読んで、第1回目のトークで来てくれたNPO法人風雷社中の中村さんの話を思い出しました。障害のある方って自分の思い出を自分で話す人もいますが、壮くんは難しい。でも、彼が過ごしてきた場所や出会った人たちの写真は残っている。その写真を入れていけるプラットフォームがあって、そのとき関わる人たちと写真を共有できたら、例えば、過去の山登りの写真を見て、それなら今度行ってみようというふうに、アーカイブがアイデアの種になるんじゃないかと。中村さんはヘルパー事業の現場でそういうことを試みているという話でした。記憶を編集することで新しい遊びが生まれて、それは家族の目線とはまた少し違ってくるというのを、『家を継ぎ接ぐ』を読んで思い出しました。

参加者1 主に出てきた話が、家というハードではなく人や繋がりの中で、結局そこに住んでできたものが、何かを解決するための増築とかではなく本だというのが、面白いです。記録することへの関心がもともとあったとはいえ、なぜ一人で住んだ時に物語が紡がれていったのか。逆に、家族と住んでいた時にもそういう物語があったのか気になりました。答えを出すために順序立てて考えるわけでもなく、人の話にどんどん乗っかっていく、それって何だろうなど。物語を中田さんが必要としていたのでしょうか。

中田 思い返せば、結婚していた頃もブログをやっていたんですが、普通の夫婦暮らしのことを開いてもしかたないと思っていたので、その時は「築80年の古民家で1年間暮らしてみた」という体験記事を書いて、それが暮らしのウェブマガジンに掲載されたことはありました。でも物語ではなかったですね。いわゆるレポート記事でした。

物語って唯一他者のことを想像しうる手立てで、他者と生きていくために物語が必要だと私は思っています。私たちは生まれた瞬間から「わたし」という一人称から離れることはできないけれど、物語を読むことによって自分とは異なる人の人生を体験できる。『家を継ぎ接ぐ』も「女一人こう生きていくべき」というライフスタイルの提唱が目的だと書き方は全然違ったと思います。だけど、私は「こんな平たい道でコケるのは私だけですか？誰か仲間はいないの？」ということの世界に向けて聞きたかったから、その道の平たさとかコケる痛さとかを共有したかった。ただし、一人の女性の独白を生々しく書いたら、とても人が飲み込めるものにはならないと思うんですよ。ちょっと気持ち悪いというか。特にネガティブな気持ちを情報として人にまると飲み込ませるのは暴力的なことだと、私は広報の仕事をして思うので、「どこかにいるかもしれない誰かの話」ぐらいの距離感を大切にしました。そうして1テーマ1記事で、だである調で、一人称かつ匿名で書いてきたんですが、結果的にそれが「物を語る」手触りの文章になった……ということなのかも。最初からすぐ狙ったわけではないんです。

参加者2 アルス・ノヴァに通っている娘の親です。半年前に家を建てて引越しをしたんですが、私は人が来る家に慣れていて、娘も人が泊まりに来るのが大好きなんです。泊まりに来てくださいと言うのは苦手なので、自然に来たくなるようなノウハウを教えてください。

中田 うちの場合は、一度来ると帰るのが面倒な遠さにあるから、泊まっ

ちやおうかなとなるんだと思います。そして、泊まりに来た人が他にもいると知れば、泊まりに来やすいので、宿泊者のアーカイブみたいなものがあるといいのかもしれない。

以前、友人に誘われた京都旅行で出会った人たちが、同窓会と言って京都からうちに泊まりに来たことがありました。普通、家に泊まるのもっと親しい人ですよね。一度しか会ったことのない人たちばかりだったので不思議でした。旅行という体験を一度共有にしている間柄だったからなのかな。泊まりに行って、お返しに泊まりに来てもらうのも手かもしれないですね。

参加者3 中田さんの周りの方は先進的なイメージがありますが、家族の話をして共感されないかもしれないという不安があったという話が意外でした。それから、こんなに外の世界とも関わりがあって、弟さんと暮らしていて友達も来てくれて楽しそうなのに、寂しさがあるというのが意外です。それってどんな寂しさなんですか。

中田 仕事で新しいことに取り組んでいるのと、先進的な家族観を持っているかどうかは別だと思うんですよ。私の家族観が先進的だとは思っていませんが、メジャーじゃないことは承知しています。20代の頃は、思想、宗教、政治の話は、広報として色がつくから避けてきました。そして家族観もあまり口にしないほうがいいなと思っていました。それは、人生について話した時に、同世代の女性に否定されることがわりと多かったから。近いからこそ異なる考えを持っていたときに傷つきやすいのが、家族観かもしれないです。もちろん相手も傷つけないから、『家を継ぎ接ぐ』でもそのあたりの明かし方は慎重にしています。

寂さがどういう種類のものかというのは難しいですね。なぜなら他の人の寂しさの種類をそんなに知らないから。友人と一緒にご飯を食べたり、弟と映画や美術の話ができるのは、寂しくないんですけど、何でしょうね……。そういえば、割と毒舌な弟に「姉は幸福の胃下垂だから、いくら食べても満腹にならないみたいに、誰かと一緒にいることを幸福だと感知できないのかも」と言われて、そんな根の深いことを言われると対処のしようがないなと思いました。うまい表現ですけど。私にとっても私の寂しさは謎めいたままです。

ササキ その寂しさを表出した時に、それに共感する人も寂しさを表出することで、寂しさが埋もれていくというもとても印象的でした。打ち合わせの時に、微かにずれる「微ずれ」というワードが出ました。著しく他者と違う属性を持っていたら、その違いを当事者同士でシェアすることは簡単かもしれないけれど、微妙にずれあっているのはシェアしにくいという話でしたね。

中田 そうですね。ほんのちょっとずれる、ほんのちょっと違うということを出すのは、わざわざ断絶をつくるようで難しいなと思います。孤独で過ごしているわけでもないし、仕事ですごく困っているわけでもないけれど、でも何かちょっと違うという感覚はたぶん誰でも感じていること。私が特殊というわけではないと思います。ただ、そういうことまで言葉にして書いちゃうところが、「微ずれ」系なんだろうなど自覚しています。

参加者4 福島県いわき市から来ました。田舎に行くと、新しいコミュニティをつくるのがわりと難しく、特に移住者は、手取り早く生活するために家族をつくるのが推奨されます。夫や妻の家族と家計を一緒にして親の世話になるから、田舎は東京よりも豊かな暮らしができるかもしれな

い。子どもの面倒も両親プラス祖父母で見られますよというふうに、家族を補強する政策がなされています。今後そういうのが進むと、特に地方の場合は家族にこれだけメリットがあるんだから、生きにくさも家族で解消してねということになっていくんだろうなど。中田さんのお話から見える社会の世相や課題は、私のやっていることにも関わるのかなと思いました。

中田 おっしゃるとおり、いろんな事情があって家族を持ってなかったり持たなかったりする人もいる社会で、家族単位で処理しなさいというプレッシャーを感じる場面も増えてきました。法律の改正でも家族に関する項目の書き換えが検討されていると聞いて、危機感を持っています。社会の流れとしては、誰とどこでどう暮らして生きていくのかは、どんどん選択肢が増えてもいいと思うんですが、どうも逆向きの風が吹きつつある気がして。それはきっと、家族というユニットをつくると管理がしやすいからですよね。そこに対して抜け道がほしいと私は思います。だから、家族単位で責任を負わなくても、場所や関係性や責任を分有したり組み替えたりながら生きていく事例を自分の生活でつくりたい。『家を継ぎ接ぐ』の起点はとても個人的なことで、その実践もただ暮らすばかりで社会的なアクションとは言いがたいサイズですが、事例という「話」をつくり、届けることならできるとしています。私は、実行しきれない大きな言葉よりも、具体的に小さな実践を大切にしたい。

あと、この暮らし自体に新規性があるわけではないのですが、私には物語にして人に共有する技術はあるので、その手段を分け合うこともしてみたいです。編集や広報を仕事にしていなくても、みんながそれぞれの「話」をそれぞれの人生のために編む力を持たせたら……。つまり、心の中のざらついたものを相手が食べられるサイズに切り出して、言葉でも写真でも動画でもいいので伝えて、届けたい人にうまく届ける技術。仲間を探し出す技術。そういうものを一人ひとりが持てたら、家族の話に限らず、もう少し生きやすくなるかもしれない。そういったことも今後取り組めたいなと考えています。

参加者4 生きづらさを抱えている人たちの寄り所をつくるということではなく、個人の違和感を言葉にしていくことによって、ちゃんと人に届けばいいし、そこが小さな場になっていくということですね。

GUEST PROFILE

中田 一会 きてん企画室主宰

1984年生まれ、武蔵野美術大学芸術文化学科卒業。IT関連出版社の企画編集をはじめ、企業広報やブランディングなどを手がけた後、2010年より公益財団法人東京都歴史文化財団アートカウンシル東京に所属し、地域で文化芸術活動の可能性を広げる取組みに関わる。2018年からフリーランスの広報コミュニケーションプランナーとして独立し、「きてん企画室」を設立。伝えることを見つめ直した広報戦略設計や企画制作を手がける。また、2014年頃より個人活動として記録やアーカイブにまつわる勉強会を複数開催。「家を継ぎ接ぐ」も当初、個人的な記録活動の一環として匿名で始めた。きてん企画室<https://ki-ten.com/>



相澤久美さんに聞いてみる！

家族という境界を揺るがす 住まいと生活 第一部

Ask Kumi Aizawa 'Houses and lives that shake the boundaries of family' Vol.1

幼少期から引っ越しが多く、血縁者以外の人たちを頼って生きてきた相澤さんは、
現在、結婚・出産を経て、東京の自宅兼シェアオフィス兼ゲストハウスを拠点に、
そこを出入りする人々と暮らしも子育てもシェアしながら、各地を飛び回る生活をしています。

相澤さんのプライベートとパブリックの境界がない家と、フォーマルとインフォーマルの境界がない人間関係からは、
プライベート（家族）とフォーマル（制度）で完結しがちな重度知的障害者の暮らしを、風通しよく変えていくためのヒントが見えてきました。

In her childhood, Ms. Aizawa moved frequently and depended on people other than her parents or relatives. She now lives in a house which is also a shared office and a guest-house in Tokyo. Following marriage and childbirth she is busy moving around all over while she shares her life and raising children with others. There is no boundary between private and public in her house, and also no boundary between formal and informal in her relationship with others. We found some tips from her lifestyle that could potentially make good changes in the lives of people with severe intellectual disabilities whose lifestyles tend to be divided by the private (family) and a formal (system).

ゲスト 相澤久美（建築家、編集者、プロデューサー）

聞き手 高林洋臣、久保田翠（認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ）

Guest : Kumi Aizawa [Architect, Editor and Producer]

Interviewer: Hiromi Takabayashi, Midori Kubota [Approved Specified Non Profit Organisation Creative Support Let's]

いろんな人に助けられて

育った子ども時代

相澤 生活のかたちはそれぞれだと思うのですが、一般的にはこうあるべきだというステレオタイプがみんなの頭の中にある気がします。私は特殊な住み方をしていますが、特殊な家に育った影響もあると思うので、その話からはじめたいと思います。

1969年生まれで今年50歳になりました。父は戯曲作家でアクティビストです。いま85歳ですが、チェ・ゲバラのTシャツを365日着ていて、戦うことに一生を費やしているような人です。母は絵描きで、デザインやちぎり絵をする繊細な人です。2歳上に姉がいます。金融の世界に働き、イギリス人のパートナーと国外に住んでいます。

私は東京生まれですが、2歳で千葉、4歳で山梨に行き、6歳から高校1年生の初めまで山形で過ごしました。自分の正義を信じる父はなぜか引っ越すことが多かったんです。家には父の仲間が集まり、小上がりで一人芝居している役者さんや、父とタウン誌を作る編集者など、誰かが家にいることが多かった。母は実家に戻ることも多かったので、周りの誰かがなんとなく子どもの面倒を見てくれていました。山形にいた14歳の頃、親元を離れて姉と二人暮らしをはじめました。15歳のとき姉が大学に行き、私は寮に入ったんですが、父に「やっぱり一緒に暮らそう」と言われて二人で暮らし始めた。でも、いろいろあって、高校を中退し、その後静岡の父の友人の家に居候しました。全然知らない土地、他人の家です。その年だけで結局、神奈川、東京と5回くらい引っ越ししました。その間、いつも誰かに助けられて生きていました。

親には「主体的に創造的に生きろ」「自分で考えて自分で行動せよ」とだけ言われて育ってきて、日本の学校は窮屈でしょうがない。それで、一度中卒で働いたんですが、「中卒じゃなんともならんぞ、手に職つけ

ろ」と周りの大人に諭されて、アメリカに留学しました。私は高校に4つも行っているんですが、1校目の日本の高校は中退。大検を受けようとしたけれど、親に「やっぱり高校に行け」と言われて、しぶしぶ行った2校目も夏休みで辞めてしまいました。そして、もう一度高校に戻ろうにも、入れてくれるところがなかったんです。でも、ちょうど庶民でも留学できる時代になっていたんで、16歳でアメリカに行きました。1年目は、お父さんお母さんと2歳の娘さんがいるホストファミリーのところで暮らして、高校2年からは寮で、世界各地から来た留学生たちと暮らしました。寮で面倒を見てくれるのは高校の先生で、代わる代わるごはんをつくってくれたり、寮にあるピリヤード台で、イギリス人とかドイツ人と夜な夜な遊んだりしました。大学生になって初めて一人暮らしをしたのですが、友人知人がよく遊びに来ていました。高校大学のいわゆる多感な時期をアメリカで過ごしているので、性格はその影響を受けている気がします。

その後、22歳で帰国しました。当時は一人暮らしでしたが、便利などころに住んでいたんで、飲んで帰れなくなった人がよく泊まりに来ていました。建築事務所に勤めていたので、事務所での寝泊まりも多くて、その仲間とは家族同然の関係でした。26歳で独立して事務所を借りると、昼間は建築事務所として使うのですが、夜はいなくなるので、デザイナーの女の子に「ここに住んだら？一緒に借りたら家賃少なくて済むよ」って。リアルに家賃を折半してみたのはこの時から。

設計の傍ら、若手の建築家仲間と、自分たちの言いたいことを言えるメディアをつくらうとって「都市の雑誌」というビジュアル文芸誌をつくりはじめました。その頃、「オルタナティブファミリー」という言葉が誰かがどこかで見つけてきたんです。血縁者と住むより、趣味嗜好が同じ人同士が集まって住む方が心地よいこともあるし、血縁に捉われない家族もあるんじゃないかとか、家族ってなんだろうといったこと

を、26～27歳頃から考えはじめていた気がします。

都市生活者の家「foo」

相澤 30歳で結婚して、すぐ妊娠したので、とりあえず旦那の実家に引っ越ししました。この時点で40回くらい引っ越ししています。当時、私は父と一緒に土地を探して家の設計に着手している段階で、32歳のときに「foo」という自宅兼ゲストルームやオープンスペースや事務所があるような家を建てました。それから18年間同じところに住んでいます。

都市には空いている空間が多いですね。例えば、夜のオフィスは空いているし、昼間は働く人の部屋や家が空いている。その空間がもったいないと思ったんです。特に東京は高密度に建物が建つなかで、自分たち家族が住むだけの住宅を建てるのなんて考えられない。だから、都市の一部が家の中に入り込んでいるような場所、24時間ちゃんと使われる空間をつくりたいと思ったんです。

地鎮祭の時から誰と一緒に使うかは決めていました。後に「フリックス タジオ」という建築・デザイン関係の編集事務所を設立することになる友人らが、ちょうど独立したばかりだったので、シェアをもちかけました。シェアオフィスと自分の設計事務所、1階に路地のようなオープンスペースをつくって、いちばん上が自宅。それから、子育てはなんだか大変、という認識があったので、子育て仲間が駆け込んで来られるような機能も当時のいろいろ考えました。

「都市生活者の家」というテーマでコンペに出して、賞をいただいたこともあります。24時間のうち、住宅、事務所、カフェなどいくつかの機能が、どういうふうに使われるかを面積と時間で計算すると、そもその家の面積に対して機能がかぶるので、実際の面積よりも体感面積は広がるよねということを考えていました。いまは、庭の桐の木が10mほどに伸びて実のなる梅があって、東京らしからぬ空間になっています。

子どもは欲しかったので産もうと。でも、自分が育ってきた環境を考えると、ひとりで子育てするのは無理、でもみんながいれば何とかかなんじゃないかと思っていました。子どもが生まれたときから、設計事務所と編集事務所の仲間が毎日いて、一緒にご飯を食べたり、子育てしたりする暮らしをしてきました。

職場と住居が近接していることに加えて、トイレくらいしか扉がないし、いつも人がいるので、プライバシーがなくて大丈夫なのですかとよく聞かれるんですが、囲い込んで隠さなきゃいけないプライバシーなんてさほどない、と自分では思っています。それに、どこにいても、みんなと一緒にいても、基本的には孤独で、私は私でしかないということを考えると、プライバシーを囲い込む必要性を感じなかった。

27坪ほどの敷地で、間口が2m5cmしかない細長い建物なんですけど、1階は長い通路があって入っていくとオープンスペース、事務所、キッチンがあるという間取り。上まで吹き抜けになっている中庭もあります。子どもが小さくて外に出づらいため、みんなに来てもらえばいいじゃんということで、イベントをよくやっていました。1階は商店街の会長さんがお茶をしに来たり、誰かが友達を連れて来たりというふうに、いろんな人が出入りする空間になっています。

通路部分の2階は事務所になっていて、片側にテーブルが置いてあって6人くらい入りました。実はこれがもう一層あるんですが、ここに友人の編集者が15年間同居していました。編集の仕事ってあまり時間は関係な



いので、終電を逃すと泊まっていく人もいました。なので、いつも誰か家にいるから私は鍵を持たずに外に出て、時々みんなが帰ってしまった後に鍵が閉まっていて入れなくなったこともありました。

2階にはゲストルームの和室もあって、1階で展覧会をやるときにはアーティストが泊まったり、映画の撮影をしている間、映画監督が何ヶ月か住んだりしています。

設計事務所のスタッフは、うちの子どもたちの保育園のお迎えに行ったり夕飯をつくったりしてくれました。「家事をやらないで住宅の設計できると思う？食事くらいつけれないとキッチンの設計なんてできないよ」と言いながら、やってもらっていたんですけど。子育てしながら仕事を続けて来られたのは、いろんな人たちと一緒に暮らしてきたからだと思っています。いまはみんな結婚してよきお父さんになっています。

3階にも居間とキッチンがあって、いちばん上が寝室になっています。ここに階段があるので大人は上るのを遠慮しますが、子どもは関係なく上がっていくので、ほぼ他人が入りこまない場所はない。

「東北記録映画三部作」という映画を撮っていた酒井監督は、いまも東京で仕事をするときには泊まって行きます。娘たちは慣れてるので、一緒にごはんを食べたりしています。港区なので、仕事をしながら子育てしているお母さんが多いんですが、だいたいマンション住まいでお父さんの帰宅は遅い。お母さんと子どもだけで過ごしているとたまにしんどくなるからということで、娘の同級生のお母さんがごはんを食べに来たりもします。という感じで過ごしているので、私がおはんをつくることもあるけれど、別の誰かが勝手につくってくれていることもあります。

いまも東京にいることは少ないですが、先日はたまたま帰ったときに久保田さんが家に来ていて、一緒に話をしましたよね。娘たちは誰とでも馴染めるような子に育っています。

大きな家族観と小さな依存先

久保田 相澤さんは建築家と言いましたが、今いろんな仕事しているんですね？

相澤 建築家の仕事の一環だと自分では思っているんですが、映画の製作や編集の仕事もしていて、東日本大震災以降、防災減災に関する情報誌も発行しています。災害支援の仕事がきっかけで、東北にできた「みちのく湖風トレイル」という歩く旅の道のプロジェクトに関わっています。

久保田 震災後、月の半分は家にいないんですね？お子さんが高校3年生と小学6年生のお嬢さんで、小さいときからそういう暮らし方をしてきたというのが、話には聞いていたけれどすごく不思議。知っている人はいえ、家族ではない人が家の中にいて、当たり前のように子どもの面倒をみたり、一緒にごはんを食べたりするような付き合いをしているというのが、自分にはできる気がしないので。なぜかというと、ここはプライベートだからという思いが私は強いんだろうなと思ったんです。その壁がないというのは、どうしてなのか。小さいときからそうだったというもあつたと思うけれど。

相澤 そうですね。子どもの頃から誰かが家にいたのと、14歳で家を出て、いろんな人にお世話になりながら暮らしてきたことは、大きく影響していると思います。私の旦那は、専業主婦の母、サラリーマンの父、自分と弟という4人家族で育ったので、最初はすごく戸惑っていました。この家と一緒に設計したのですが、3階の居間も全部ガラス張りで丸見えなので、「プライバシーがないじゃないか」と言われましたけど、今ではすっかり慣れて何も気にしなくなっているので、慣れはあると思います。ほんとにプライバシーってなんなんですかね。何を隠したいのか。

久保田 そうですよ。固定観念に捉われているのかもしれない。住宅って、本当に開かない限り、人がやってくるところじゃないから、閉じていくんですよ。

相澤 そうなっていますね。でも、中村好文さんという先輩の建築家が取材しに来た時に、彼が原稿の冒頭に書いたのは、「僕が小さい頃は、どこの家も鍵が開いていて、子どもたちはどこの家にも勝手に出入りしていて、誰かの家でご飯食べて、誰かの家でお風呂に入って、どこの子であろうとご飯を出して、お風呂に入れて、叱って、可愛がって。そういう中で僕は育ってきた。それが、だんだん閉じる方向になっていった。」って。誰かが縁側に座っているとか、勝手に家の中で何かしているというのは、今でこそ不法侵入罪ですけれども、かつては当たり前にあつたことなんだろうと思います。

久保田 私には、障害のある子どもがいるんですが、プライベートとか家族については一般的な考え方を持っていて、家族でなんとかしなきゃと思ってきた。アルス・ノヴァという開いている場所もあるけれど、そういうパブリックな場とプライベートは分けるという考え方をしてきた。

でも、牡が23歳になり、夫が病気になって亡くなったことで、一気に家族がダメになってしまうというか、プライベートでなんとかするというのが立ち行かなくなつたんです。もちろん、私たちの場合は、福祉の手が入っていてケアしてくださるだけけれども、それはあくまでもお仕事なんですよ。相澤さんみたいに友達になるとか、金銭のやりとりなしに助けをもらうという関係は組み上げてこなかったのが、憧れがあつて、これからどうしていったらいいんだろうと思ってるんです。

相澤 うちの子どもたちは障害があるという分類はされていないので、久保田さんが抱えている課題を共有できたりできなかったりすると思うんですが、私は、少し気持ちが弱い母にも強すぎるアクティビストの父にも頼れない、他の誰かに頼らないと生きていけないという状況を子ども

の頃に体験しているんですね。で、自分に子どもができたときに、この子どもたちが、私がいないと生きていけないような状況はつくっちゃいけないと思つたんです。自立してたくさんの依存先を見つけることなんだ、というのは熊谷晋一郎さんがおっしゃっていたことですが、生まれた時は親と子が一対一の関係だけれど、子どもなりに依存先を分散させていって、いろんな小さな依存先があるから生きていける。自分が育ってきた家庭でも、自分の子どもを育てていくなかでも、それを実践してきたんだと思うんです。

それから、自分が自分の思ったように生きていくという姿勢を見せることが、娘たちにとってもよいのではないかと考えています。というのも、私は、母に「あなたたちが大きくなるまで我慢して家にいる」と言われて育ち、とても嫌だったんですよ。気持ちはわかるけれど、そんなこと言うなら、我慢せずに出て行って欲しかった。私たち子供のために自分を犠牲にしている姿をみるのは辛かった。信頼されていないな、とも思った。なので、私は私なりにできることを精一杯やって生きていくし、彼女たちがやりたいことをサポートできるようにしようと考えてきました。

私にとって家族という枠はとても大きくて、設計事務所の仲間も、映画と一緒につくっている仲間も、雑誌をつくっていた仲間も家族。だから、旦那じゃなきゃダメとか、自分の血のつながった人じゃないとダメという感覚はないです。それはもうずいぶん早くに、血のつながった家族を失っているからなんじゃないかと思います。もう、私が生まれ育った家族4人で集まる機会は二度とない。それがある人は羨ましいと思う。でも、私にはもっとたくさんの、いろんな大事な家族がいると思っているので幸せです。

孤独を前提にした信頼関係

久保田 依存先っておっしゃつたけど、強くて孤独に耐える力があるから人とつながっていけるのかな。

相澤 孤独に耐えるというより、全員孤独だということを実感しているだけだと思います。どんなに仲良い人や好きな人がいても、自分が孤独であることは変わらないじゃないですか。それが前提にあるから、みんな大事って思える。

久保田 そうですね。だからある意味ドライだね。この間、泊まった日、ちょうど相澤さんが2〜3週間ぶりに帰って来て、翌日また東北に行く予定だったらしいんですけど、翌朝、ご主人は「おかえり」と言っただけで「またどこに行くの？」って聞かなかつたですね。また出かけると聞いて、ご主人は「あ、そうなの」と言ってどこかへ消えちゃつた。私の感覚だと、まず「いつ帰ってくるの？」とか「今日？え？もうそんなすぐ行っちゃうの？」とか言って、それから「こんなに大変だったのに、あなたはどこ行っちゃつたの？」みたいなことを、たぶん言っちゃうだろうなと思うけど、ご主人は一切文句を言わなかつた。

それから、高校3年生の娘さんが、進学で悩んでいて、お母さんと話したそうな感じだつたんです。でも相澤さんは疲れ果てちゃってるから、「私、高校も大学もちゃんと行ってないからわかんない」とか言って寝ちゃつたんです。それで、私、娘さんとお話してはいたんですけど、そういうとき、私は母親らしくしなきゃって思うタイプなので、友達に来ていた

としても「ごめんね、今日、娘が大変なことになっているから、ちょっと席外して」とか言って、娘の話を聞いちゃうんですよ。それで、ろくなことは言わないんだけど、あーでもないこーでもないって言っちゃうんだろうなと思つた。でも、相澤さんは「久保田さんに聞いてごらん」と言って、するーつとしていたんです。それで、私の思っている家族の枠組みと、相澤さんが実現している家族の枠組みは、本当に違うんだと思つた。家族の枠組みを曖昧にしていくことで、いろんな人が入り込める家族をつくれるんだというのを、まざまざと見せていただいた感じがしたんです。

相澤 血がつながっている家族という、いま4人ですが、お互いにとでも信頼しているんです。次女はまだ母親として見ているところがありますけど。旦那はもともと仕事のパートナーなんですけど、信頼できる人なので、「私そろそろ子どもが欲しいから、結婚という形態をとらなきゃいけなくなるけど、子どもをつくってくれない？」とお願いして結婚しました。恋愛ではなく信頼している人だから一緒に子育てもできるだろうということなので、「お互いに好きな仕事をちゃんとやろう。ただし、子どもはちゃんと二人で守りましょう」という約束。なので、お互いに仕事のことは何も言わないというか、むしろリスペクトしている。だから、「居る、居ない」に関しては「必要だから出張に行くんだろう」としか思っていない。「明日の子どもたちの晩ごはんは大丈夫？」みたいな会話はしますが、最近では長女が全部できるので、そういう会話もなくなってきた感じなんですよ。

で、長女の話に戻ると、久保田さんが来る前の晩に電話がかかってくる話を聞いたのと、帰宅して2週間ぶりくらいに会ったら、「受験やめていいかなあ？」って彼女が言うから、「うん、いいんじゃない？やりたくなかつたら、やらなきゃいいし。やりたくなつたら、またやればいいし」って答えたの。「ただし、自分の判断はその後の自分に確実に影響してくるから、いろんな人に相談したら？」って言った後の久保田さん登場だつたわけです。だから、あの時、久保田さんにお話しできて刺激になつたみたいだし、その後、一人で初めて浜松に来てレッツを体験させてもらって、「すごく面白かつた、いろんな人の話聞けてよかつた」と言っていました。

事務所をシェアする人たちとも、よく話す努力をしてきました。実はこの家、雨漏りするんです。それで、編集事務所の机が水浸しになつたことがあつて。赤入れした原稿がずぶ濡れになって、ドライバーで乾かしたら、フリクションの赤ペンを使っていたので全部消えちゃつたことがあつたんです。普通なら賠償問題になると思うんですけど、笑って済んだ（ちゃんと謝りましたけど）。今までいろんな人が出入りしていますが、一度もトラブルになつたことがないんです。みんなに我慢させちゃっているのかもしれないけど・・・。

私のキャラクターによるころもあると思います。すぐ謝っちゃうから。それから、「無事に生きていればいいや」ということを共有できる人たちに声をかけているんだとも思います。

従来の家族観に捉われない

重度知的障害者の生き方

久保田 たけしと生活研究会では、家族の枠組みに捉われない、重度知的障害者の生き方を模索しています。年齢が上がってくると、子どもに

は自我が出てくる一方で、親は衰えていくので、家族と一緒に暮らすのが難しくなっていくんです。そうしたときに、いろんな人と一緒に暮らす選択肢として、グループホームがあるけれど、疑似家族のようになってしまう。障害者の生活も、いろんな生き方や家族のあり方があるとは思わず、家族は良いものだ、家族に変わるものはないんだという前提で組み立てられてしまっているのかもしれない。

高林 そもそも久保田さんが、壮くんが親元を離れたほうがいいと考えるようになったきっかけを教えていただけますか。

久保田 社と家族旅行に行ったのは、彼が中学3年くらいが最後なんです。なぜかという、旅行先でも入れ物に石を入れてたたくという行為をずっとやっていて、旅館の目の前に砂利が敷いてあると、そこでストップして中にも入ってくれない。そうすると、その砂利のところで夫と娘と交代で面倒を見て、空いている時間にごはんを食べたりお風呂に入りに行くという感じだし、無理やり部屋に入れても大暴れして、なんのために泊まりに行ったのかわからなくなっちゃうんです。それで、一緒に旅行に行くのはやめたんです。

ところが、彼が二十歳のときに、アルス・ノヴァで旅行に行くことになつたんです。「これは大変だ。みんな眠れないよ」と思つたんですが、その予想は外れて、彼はみんなと楽しく過ごして帰ってきた。結局、親だったからダメだつたんだ、親じゃない人となら心地よく過ごせるんだということが決定的にわかつた。こっちも我慢を重ねて一緒にいる部分もあるので、彼には彼の幸せがあり、私には私の幸せがあるというふうに、お互いの生活を分けていこうと思つたのがはじまりでした。彼はかなり障害が重いんですが、それでも自立ができるということがわかつたのも事実。

でも、現実的には、一人暮らしが実現できるほど福祉サービスは充実していないんです。グループホームや入所施設もあるのですが、そこに収まりきれない部分もあるので、どういう生活がよいのか、考えながらやってみようということで、3階のシェアハウスとゲストハウスがはじまりました。

でも、私がかも相澤さんみたいな家族観を持って生きていたら、そんなことをしなくても済んだかもしれない。問題はプライベートとパブリックを明確に分けている発想なのかもしれないと、ふと思つたりもするんです。

相澤 アルス・ノヴァで旅行に行ったときは、久保田さんが旅館で困つたようなことはなかつたの？

高林 何回か一緒に泊まりで出かけているんですが、同じような現象はもしかすると起きているのかもしれないけれど、家族で出かけるのと、仕事で出かけるのでは違う部分があるだろうし。でも、それを抜きにしても一緒に旅行して楽しい部分がありました。

久保田 子どもに障害がある家庭は、家族の枠組みがすごく強いんですよ。他者が入ってこない家族で何が起こるかという、お互いの関係が煮詰まるんです。

相澤 入ってこないというか、入ってくる環境を家ではつくっていないん

ですよ。

久保田 そうですね。だから、アルス・ノヴァというオープンな場があるんですが、家族の中に他者がいるのは想定してこなかった。旅行では、家の生活がそのまま外に出ただけだから、社は混乱して、私たちはうろたえる、というかたちにしかならないし、誰かが「見てるから、どこか行っておいで」と言ってくれることもない。そういう閉塞感があって、お互いに飽き飽きしちゃったんですが、その点、スタッフは全然違いますよね。

高林 一方で、付き合いが長くなると、家族以外でも閉塞感のある関係になるかもしれない。支援者が親のような立ち位置になってしまうかもしれない。

久保田 それを防ぐためには、他者の存在が必要だと思って、ゲストハウスを併設しているんです。重度知的障害者の場合は、家族じゃなくてもケアされて暮らすことになるから、その関係性が閉鎖的にならず、風通しよく成り立つ方法を考えていきたいと思って、相澤さんのお話をうかがいました。

インフォーマルな支援のジレンマ

相澤 久保田さんって「家族ってこうあるべき」というのが強いんだなというのが、意外でした。けこう型破りなことをやっているように見えるのに。それは、ご自身が育った環境によるんだと思いますけど。私は、子どもが赤ん坊のとき、イライラすると、スタッフに預けてちょっと散歩に行くことが多かったんです。だから、子育てに煮詰まったことがあんまりなくて。

久保田 私は自分で何とかしなきゃという思いが強すぎて、なまじ体力があったから何とかなっただけれど、もうなんともならないところまで追い込まれて気づいたわけ。でも、もうちょっと早く気が付けばよかったなという感じがする。

高林 東京で外出支援をしたり、知的障害者の自立生活を推進したりしている中村さんの話によると、グループホームも家族になることを目指すそうなんです。でも、子どもが親を必要としているときに家族が必要だというのはわかるけれど、大人に対しても家族が要るのかというと、そうでもないんじゃないかと。

家族ではなくヘルパーと暮らすのだとしても、仕事として支援するからには、友達とも違うし、本当の意味での信頼関係になりづらい。壮くんの場合、本人の命に危険があるかもしれないので、24時間見守りが必要で、それを保証するフォーマルなサービスは彼の権利ですが、24時間支援者が付き添って生活を組み立ててしまうと、インフォーマルな関係ができづらくなるというジレンマがあります。

なので、積極的によその人も関われるように、ゲストハウスも併設してみようかなとか、シェアハウスには障害のある人だけではなくて、面白そうだから住むという人もいたほうがいいんじゃないかなと。

相澤 私は設計の仕事をしているんですが、建築は大工さんや左官屋さんが

いてはじめて成立する。もっといえば、私はコップもペンもパソコンもつくれないわけで、いつも誰かに支えられて生きているんですよ。私が健常者だというのも、そういう人たちに合わせた社会制度があるから。というわけで、いろんなものに依存していて、それがフォーマルかインフォーマルかという話ではないような気がするんです。お金をもらってケアすることと友達としてケアすることにそんなに大きな違いはあるんでしょうか。ただ、命の危険があるから目を離せないというような状況には、私は直面はしてないのですが。

高林 仕事で支援する立場になると、責任が過剰になって安全志向になりがちなんです。

相澤 でも、友達として関われば責任がないということではないし、お金をもらうことで責任が生じるから面倒を見るというのも寂しい。仕事かどうか関係なしに一对一の関係という点ではあまり変わらないはずなのに。

久保田 スタッフなんだからもうちょっとしっかりしたら？と言われるくらいに、だらっとしちゃうのもありなのかな。私はそれもできなかった。家族でなんとかしなきゃ、他人に迷惑をかけちゃいけないと思っていた。

高林 結局このシェアハウスも、他に任せられないから自分でつくりあげてしまったわけですね。

参加者1 レッツの利用者の母です。うちは福祉サービスをたくさん使っているんですが、実は今日から二泊三日で友人のお宅に泊まっているんです。前からずっと「泊まりにおいで」と言ってくれていたんですけど、何年前かに一回泊まりに行ったきり間があいて、この間、その人が仙台まで二人で旅行に行ってくれて、それが大成功だったんです。親だと「暴れたら困る」と思って狭めてしまって、本人の経験値が増えていかないけれど、その旅行はいい経験になったなと感じたんです。

こうやって関わってくれる人が増えれば、本人はいろんなことが経験できますよね。私とだと、普段スーパーには連れていけないんですが、他の人とだと普通に買い物して荷物も自分で持って帰ってくるっていうんですよ。そういう驚くような経験ができるので、そういう人たちが増えてくれたら住みやすくなるなと思います。

ただ、その友人たちに「また一緒に行ってね」とは頼みづらいんです。友人は全然嫌がっていないけれど、何となく遠慮しちゃう。一方で、福祉サービスは上限はありますが、遠慮なしにフルで使えるわけです。

相澤 健常といわれる子どもたちの親も、保育園には安心して預けるけれど、友達に預けるのは遠慮しますよね。それってなんなのかな。私が図々しいのかもしれないですけど。預けると子ども同士が遊ぶから、預けた先のお母さんも意外と楽になったりするんですけどね。「ダメな時はダメって言ってね」という関係ができていればよいけれど、「こうじゃなきゃいけない」と思ってしまうのは、障害の有無とは関係ない気がします。

参加者1 とはいえ、健常の部類に入る下の子の時は、気を遣わずにお互い様という感じで、泊めてもらったりとかしていたので。障害のある子

だと「相手に迷惑をかけるんじゃないか」とか、「ご家族はいいと思っていいのか」とか、気にしちゃうんですよ。

参加者2 逆に壮くんと遊びに行きたい人からしても、親や施設を通さないといけないのはメンドクサイ。「今夜飲みに行こうよ」と誘って、返事が返ってくればいいですけど、壮くんが本当に行きがっているのかという意思を確認できないから、「待った」がかかる。それは安全装置として必要なかもしれないですが、もっと気軽に行ける方法があればいいですよ。

相澤 不思議ですよ。親は不安だと思っても、預けてみたら楽しくやれた、というようなことがきつとあるんでしょうね。

家族の解体と成熟社会のライフライン

参加者3 僕の事務所も夜泊まれるようにしていて、地方の人を泊めています。僕は福島から来ているんですが、原発事故が起きた時に、どの家族も解体される経験をしています。放射能や避難についてどう考えるかという局面で、離婚が多く発生したり。そういう時に、家族と話をしても埒が明かなくて、友人同士のほうが感覚が合うので、親は残って子ども世代同士で避難したりしたわけですが、経済的な余裕も人脈もない人は留まらざるを得なかった。つまり、全国各地に逃げられる場所があるのは何よりのライフラインで、逃げられるということは豊かなんだという話が出てきたんですね。

家族に限らず、頼れる先があるかどうかで選択肢が変わってしまうということを経験した身からすると、逆に、家族が解体される経験に慣れていかないと、いろんな人たちと手をつないで暮らしていけたらいいねという話は、一切伝わらない感じがする。たぶん僕は老後はお金がなくて老人ホームには入れないので、最低限の年金で古民家を改修してみんなで暮らすというような状況に、いずれはなっていくと思う。だから、相澤さんの家のような場所を増やして行って、そういう状況に慣れていかないと。

相澤 いま日本中なのか、少なくとも東京ではシェアハウスがすごく増えています。だから、結婚ではなくそれぞれ暮らしていくけれど、仲間はいるという状況はもうできてると思っています。壮くんのシェアハウスもできたんですよ。いつからはじめるんですか。不安はありますか。

久保田 10月から社はとにかくシェアハウスに住む。そこから始まるんですけどね。不安はないです。やっとここまでできた感じはします。子育てって、ある程度の年齢までは養育者が必要だと思うんですけど、その先は独り立ちしていくもので、本人が困ったら帰ってくるのはもちろんありだけれど、自分で何とかしてくだろうって思ってるんです。

それは社も一緒に、こんなに重度で何にもできない人でも、自分で人生をつくっていけると思っているんです。だから、彼にとって本当に新しい人生がやってくるんじゃないかな。親と一緒にいたら、食事も健康も管理してもらえなけれど、離れて暮らすことによって、ご飯が食べられなくなるとか病気になることもあるかもしれない。でも、それは彼の人生なん

じゃないかなとも思っているんです。

相澤 そう思うようになったのには、きっかけがあったんですか。

久保田 やり切った感があるんです。で、これ以上は無理だなんて思っているんです。私がこれ以上彼と一緒にいることが最善だとは思えないし、家族からの自立が私自身にも課せられている感じがします。

相澤 久保田さんは頑張れちゃうし、そうせざるを得ない状況があったんでしょうけれど、いろいろできすぎちゃったんですかね。

久保田 いえいえ、相澤さんが稀有な人なんだと思うんですよ。私は一般的な家族観に縛られながらも生きていけたタイプだと思うんです。私が仕事を取るか社を取るかという選択を迫られた時に、たぶん相澤さんと両方なにかしようとしたと思うんですけど、私は目の前にいる社を何とか育てなきゃいけない、これは仕事どころじゃないという結論になったんです。それは私の選択なんだけれど、やっぱりどこかに引っかかりがある。レッツの活動をはじめたのは、家族が生き延びるためにやらざるを得なかったんですが、それが正しかったのわからなくなっちゃったんです。ここは社たちの場所なんですよ。自分の場所だと思っていたんだけど、何か違ってきちゃったのかな。だから、私は私で自分が生き延びるための場をつくらなきゃいけない。壮抜きで。私は家族を解体したくてもうがないんです。私個人の人生として何かをやり直さなきゃいけないと思っているところです。

GUEST PROFILE

相澤 久美 建築家、編集者、プロデューサー

1969年生まれ。米国で学んだ後帰国し、97年に設計事務所を設立。建築設計の傍ら、雑誌編集、ドキュメンタリー映画の制作、配給、災害支援、防災業法紙発行を行う。2015年からみちのく潮風トレイルの運営計画策定にかかり、2017年にNPO法人みちのくトレイルクラブを設立。2002年自宅兼仕事場を設計、建設し、さまざまな人、団体がシェアしている。17歳と11歳の2児の母でもある。



相澤久美さんに聞いてみる！

家族という境界を揺るがす 住まいと生活 第二部

Ask Kumi Aizawa about 'Houses and lives that shake the boundaries of family' Vol.2

仕事仲間やご近所さんやお客さんなど、いろんな人が出入りする家で子育てをしてきた相澤さん、子どもたちを外に連れ出しでは、あえて見ないようにして人に託してきたロビンスさん、壮の母という役割から解放されて自分自身の人生を再開しようとしている久保田さん。その暮らしぶりからは、それぞれの家族観の違いや、社会が「家族」や「母」に要求する外圧との戦いが見えてきました。重度知的障害者が親から独立し、その暮らしにさまざまな人が関わりはじめることで、親自身の人生は、そして、社会の外圧を生み出すステレオタイプな家族観は、どう変わっていけるのでしょうか。

Ms. Aizawa raised children in a home where various people arrive and leave on regular basis. This includes business associates, neighbors, and customers. Ms. Robins took children out of the house and risked leaving them in the care of others. Ms. Kubota is transitioning from her primary role as the mother of Takeshi in an attempt to restart her own life. It becomes clear that each one of them have different views about the family structure, although they all share some of the struggles against the external pressure that comes from a society that demands the conventional roles of the "family" and "mother". People with severe intellectual disabilities become independent of their parents, and various people begin to participate in their lives. How can this big step towards independence change the life of their parents? How can it change the stereotypical view of the family that arises from the external pressures of society?

ゲスト 相澤久美 (建築家、編集者、プロデューサー)、ロビンス小依 (ミュミュ・ワークショップ主宰)

聞き手 久保田翠 (認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ)

Guest : Kumi Aizawa [Architect, Editor and Producer], Sayori Robins [MuMu Workshop]
Interviewer: Midori Kubota [Approved Specified Non Profit Organisation Creative Support Let's]

それぞれの家族と子育て

久保田 相澤さんは出張が多い生活をされているんですね。出張のついでに浜松に寄って泊まったり、東京でも会議があると必ず飲み会までいるので、「この人、子どもがふたりいるのに、どうやっているんだろう？」という不思議に思っていたんです。それで、聞いてみたら、「子どもはいろんな人が見てくれるの」って。「そういう生活、話には聞いたことあるけれど、現実的に可能な？」とそのとき思ったんですね。当時、私には家庭の中のことで助けてくれる人はいなかったの、壮のことは、家族でなんとかしなきゃという思いが強かったです。そして、今ようやく、手放さなきゃと思うようになりました。

ロビンスさんは、いろんなイベントに娘さんたちを連れて行きますよね。知らない人はいないんじゃないかというくらいに有名な娘さんたちなんです。その様子を見て、外側に向けて家族を揺らしていくって、こういうことなのかと感じています。

なので、今日はおふたりに、どんなことを考えながらや生活や子育てをしてきたのかとか、「家族」という枠組みに捉われない子育てや生活の仕方について、聞いてみたいと思います。

相澤 相澤と申します。建築の仕事をしたり、編集や映画のプロデュースをしたり、環境省と「みちのく潮風トレイル」というトレイル（歩く旅の道）を東日本大震災の被災地沿岸部につくり、運営する仕事をしています。

2002年に東麻布に自宅兼事務所兼シェアスペースを建てました。当時、子どもができる予定だったのですが、自分ひとりで子育てをするのは無理だと思っていたので、いろんな人とシェアする家をつくったんです。そこで17年間子育てをしています。子どもたちは、私の設計事務所と当時シェアしていた編集事務所合わせて14~15人の大人がいる中で、0歳から育てています。スタッフたちも、娘というか妹というか親戚の子のような感じで接してく

れています。いまは、ドイツ人の映画監督と日本人映画監督の夫婦とその娘と一緒に住んでいて、商店街の会長さんが遊びに来たり、打ち合わせに来る人がいたり、ふらっと遊びにくる人がいたりします。

ロビンス うちは娘がふたりいるんですが、小さい頃から子育てをギブアップしているんです。親子ともに家の中でじっとしていられない性格なので、そんなに家が心地よくないものもあるんですが、預けたいし外で育てたいという気持ちがありました。私ひとりで育ててもいいことないと思うので、やたらと外に連れて行って、わりと放置しています。小さい頃はもちろん目を向けていたんですが、大きくなってくと私が目を向けないほうがいいと思うこともあって、あえて見ないようにしている部分もあります。

相澤 うちも娘がふたりですが、上の子は本を読んだり勉強したりするのが好きで、自分でどんどんやっていくタイプの子、下の子は勉強が好きじゃなくて、明るくケラケラしているタイプ。基本的には信頼関係はできているので、やりたいようにやってほしいという感じで、だいたい任せています。

子どもが生まれて、突然、私が母親という生き物に変わるわけではなくて、私は私のまま、私なりに生きるしかないんですね。だから、自分が親だという認識はあまりなくて、娘が娘なりに生きていくことを私なりに手助けするというスタンスです。もちろん、2歳ぐらいまでは保護してあげるという気持ちはあった気はしますが、「こうあってほしい」とか「このほうがいい」というようなことは、聞かれて答える以上には言わないようにしています。それから、仕事で留守のことが多いんですが、言葉がわかるようになってからは、何のためにどこに行つて何をしてきたのかを話して、「なぜお母さんがいないのか」ということを彼女たちなりに考えられるきっかけを渡しておくようにはしていた気がします。

久保田 私は、家族は一緒にいなきゃいけないと思っていたんですね。特に母親は、毎日ごはんをつくったり世話したりしなければならないと思っていたんですが、相澤さんの話を聞いていると、一緒にいることが家族の必要条件ではなくて、ちゃんと私はあなたのことを見ているよというメッセージが伝わってれば、家族って成立したんだなと感じます。

血縁、生活を共有するパートナー、複数のレイヤー

ロビンス 私は、上の子が中学生になったので、どうやって離れようかと考えています。一方で「あれしろ、これしろ」と言ってしまうことも自覚していて。私のよくないところは考えがブレるところなので、相澤さんのブレなさがすごいと思います。

相澤 ブレないというかひとりでやりきれないの。私は「なんとかごっこ」が本当に苦手で、子どもと一緒に遊べることといったらお料理だったんですね。だから、2~3歳くらいから包丁を渡して「ごはんつくって遊ぼう」とか、洗濯機をのぞいて「ぐるぐる回って面白いよね」とか言いながら洗濯を手伝わせたり。ともかくひとりじゃやりきれないから、いろんな人に子育てを手伝ってもらっているし、子どもたちにすら手伝ってもらっている。長女はいま受験生ですが、お父さんとお母さんと自分のお弁当をつくって掃除して洗濯してくれるし、妹の世話をしてくれます。子どもを自分の所有物だと考えちゃうことってあると思うんですけど、私はパートナーや共同生活者という感覚なんです。私ができることができる人という感覚。なんか私自身がいろいろダメなんですよ。

ロビンス 私もいろいろダメだし、子どもは私のダメさを見ていると思うんですけど、あんまり見られてはいけないような気がして、相澤さんのようにはいかなかったな。

久保田 私にとって夫はパートナーだけど、子どももパートナーという感覚はいいですね。

相澤 夫もパートナーですね。もともと仕事と一緒に信頼できる人だから結婚に至っているの。子どもたちも血がつながっていても他人じゃないですか。彼女たちが何を考えているのか、本当にはわかってあげられないし、わかってもらえないという圧倒的な孤独がそれぞれにある。だからこそ一緒に暮らしているんだから、それぞれができることをできる範囲でやろうという考え方です。

久保田 パートナーとか対等という感覚って、話ではわかるんだけど、どうやって培われていくんでしょうか。相澤さんはアメリカ生活の影響も大きいかもしれないし、幼少期の体験も影響しているかもしれないけれど。

相澤 私は親にあまり頼れない幼少期を過ごしてきて、期待して裏切られるしんどさはもう無理という時期があったんですね。だから、誰に対しても過度な期待をしないし、最終的にはひとりだよねというところをしっかりと持っているのかもしれないですね。すぐ人には頼っちゃうんですけど、それで断られても傷つくんじゃないで、それはそれでしょうがないことで、やってくれたら「ありがとう」と思う。子どもにもこうであってほしいという期待はしたくはない。最終的には無事に生きていければいい。親が過度に関与すると、子どもたちがよそに頼る先を見つけづらくなる気がします。

久保田 私も、子どもに障害があるからなおさらなのかもしれないけれど、

家族でなんとかしなきゃという思いが強すぎて、結局なんともならない状況になったときに、頼る先がなくなっちゃったんですね。今日のテーマを「家族という境界を揺るがす住まいと生活」にしているのは、そういう体験があるからなんです。

ロビンス 私は子どもが小さい頃よく家に人を呼んで一緒に子育てをしていたんです。例えば、シングルマザーの人を呼んで、一緒にごはんをつくってお風呂入って、子どもたちが寝たら帰るっていうのを週何回かやったり。そうするととても楽なんです。他の人に助けてほしいというのもあったし、子どもにとっては面白い体験だからいいじゃんと思って。いまは実家にいるので人を呼んだりはしていないんですが、週末は家族で外に飛び出ていく感じです。

「行った先で、全然子どもを見てないよね」って久保田さんに言われたんですけど、それができない場所にはそもそも連れていかないんです。レッツはそれができているので、最近バス代を持たせて、子どもだけで行かせたりしています。レッツは私の家の範囲という感覚で、何かしでかしたら誰かが怒ってくれるだろうという安心感あります。ほかにもいくつかそういう場所があるんですが、とてもありがたいことです。「うちの子、私じゃ無理なんで、誰かお願いします」という感覚で預けています。

久保田 外側に家族があって、信頼できる人たちがいるというのがいいですよ。それがいろんなことを豊かにして、楽にしていく構造なのかもしれないですね。

ロビンス 夫がアメリカ人なんですけど、日本で暮らしていると圧倒的に日本語に囲まれてしまうのが居心地良くなって、子どもたちは英語で話したいみたいなので、たまに夫と娘たち3人だけで出かけて、彼らの文化のなかで遊んだり、同じようなバックグラウンドを持った国際ファミリーと過ごすこともあります。夫は夫なりの子どもたちとの過ごし方があり、4人いるときはそのときなりの過ごし方がある。なのでレイヤーがいくつかありますね。

久保田 この間、私、相澤さんの家に泊めていただいたんですけど、よその人が住んでいるんですね。もちろん相澤さんのお友達なんですけど。偶然トイレで会ったから「こんにちは」「お邪魔してます」みたいになって、不思議だったんですね。どこがプライベートなのか全然わからない。

相澤 シェアハウスだしシェアオフィスなんですよ。滞在時間は、人によっていろいろ。365日いる人もいるし、事務所として使っている人もいるし、月に1回しか来ない人とか、ほんのちょっと遊びに来る人とか、いろんな人がいろんな形で出入りしていて、私はあんまり頓着しない。隠さなきゃいけないプライベートがないんですよ。寝てしまえばひとりだし。

久保田 でも、ひとりになりたいと思うことってないんですか？お子さんたちはどうなの？小さい時からそうだから慣れちゃうのかな？

相澤 出張ってひとりだったりするし、本当にひとりになりたいときって、カフェに行ったり雑踏の中に入ったほうが圧倒的にひとりになれる感じしませんか？みんな他人、みんな知らない人っていう状況。私も子どもの頃から、今の家ほどではないですけど、両親の友達が入りしている家で育ったから、他者が自分の生活圏に入ってくることに違和感はないですね。子どもたちも気にしてないですよ。

久保田 私の生活では他者の必要性って感じたことがないんですよ。むしろ苦手。他の人がいるとよそゆきになってしまう。お家掃除しなきゃとか、綺麗な格好しなきゃとか、ご飯出さなきゃとか。

相澤　ちゃんとした人なんだよね、久保田さんは。久保田さんが泊りに来た日、半月くらい出張してて久しぶりに1日だけ東京に帰った日だったんですね。最初は娘も入れて3人で話していたんですけど、私ヘトヘトだったので、久保田さんと娘をおいて寝ちゃったんですね。家は散らかっているし。全然ちゃんとしてない。

久保田　娘さんに対して「あんまり片付いてないね」の一言で終わったんですよ。私だったらそこから小言がはじまるんですね。「なんで片付いておかないの？お客さん来るって言ったでしょ!」って。

相澤　なんなら、うちはお客さんが片づけてくれる状況ですから。

久保田　プライベートとパブリックを明確にわけると生活をしてきちゃったから、今になって、これだから辛くなってきたんだという反省があって、障害のある人たちがシェアして住む場所を今つくっているんですが、普通の人が泊りに来られる部屋をひとつ用意しています。なぜそんなかたちにしたかというと、ここに住む人たちは家族ではないけれど、家族化していつちゃうんですよ。福祉って、家族に代わって自分たちが面倒を見るということにモチベーションを持つ業界なので。でも、それじゃダメなんじゃないかなと思ったんです。私は家族という枠組みが強すぎて苦しむことになったわけだから、一回離れて生活してみたいと思っているし、疑似家族をつくる必要もないと思っているんです。となると、他者が必要なんですよ。常に同じメンバーで固定されると疑似家族的な枠組みがつかられてしまうから、そうじゃない生活をここでどうやって実現させていくのかというのが、今回のテーマなんですね。

相澤　久保田さんのいう「家族」って血縁家族のことですよ。あとは、お父さんとお母さんと子どもみたいなこと？それで、血の繋がっていないケースを「疑似家族」と言ったんだと思いますが、私は、何かを共有できている人たちのことも「家族」と呼んでいるんですね。そもそも定義の違いがあるなと感じました。

久保田　何をやっても許されるのが家族だった気がする。そこにパブリックみたいなものはあまりない。

相澤　何をやっても許されるじゃないですね、うちは。

久保田　そうですね、礼儀がある。他人にも言っちゃいけないことは家族にも言っちゃいけないんだと思うんですが、私は言っちゃうんですよ。だから、本音を言って喧嘩をしても、「今日のごはん、何にする？」って言ったら「何々にしよう」みたいな会話がすぐにはじまる。何でも言えるよさもあるけれど、辛くなる部分もあるんですね。

家族や親に対する外圧と自己責任論

ロビンズ　私みたいに考えがブレて、今日こうだと思っていたのに明日は違うと思っているような人が、家族の中だけで子どもを育てるのって無理でしょ、危ないでしょと思っていたので、開き直って「子育て手伝ってください」って言い放っているんですけど、福祉の世界だと、「家族でどうにかしてくださいね」という外圧があって、ダイレクトには言われなけれど、そういう壁があったんじゃないかなと思います。いまは徐々に、「子育てはみんなでしましょう」という時代になりつつあると思うんですけど、まだ福祉のほうって全然そういう感じじゃないですよ。

久保田　福祉って制度に則って国が事業委託するというかたちになるか

ら、命を守るという「仕事」をすることになるんです。でも、いまロビンズさんが言った「みんなで育てましよう」というのは、福祉という仕事ではなくて、友達やちょっと助けてくれる人を増やしていくことだと思うんですね。そのときにヒントになるのが、相澤さんの考え方。託して委ねていかないと広がらないんだと思う。福祉の制度の中では、なかなかそこまではいかないような気がするんですよ。

ロビンズ　当事者や家族が委ねられない社会になっちゃったんですよ。子どもはまだハードルの低いほうですが、重度の障害のある方の場合はハードル高い。お母さんが持っている「申し訳ない」という気持ちが、どうしたらなくなるのかを考えていました。

久保田　やっぱり見ないのがいちばんいいんですよ。一度手放してしまえば、意外と本人たちには力があるから、ちゃんと関係をつくっていけちゃうのかもしれない。結局苦しんでいるのは親ばかりで。

相澤　障害の有無に関わらず、過干渉になってしまう親子関係って常にあるじゃないですか。だから、子どもには生きてゆく力が備わっているんだと信じて、手放してみるのはいいいことなんじゃないかと思います。

ロビンズ　怒られますけどね。私も子どもも。

相澤　私も「そんなにずっと外に出ていたら、子どもたちがかわいそう」って言われることが多いんですよ。でも、子どもたちは子どもたちなりにちゃんと生きているので、かわいそうと思われることのほうがかわいそうだよと私は思うんですけどね。だから、一緒にいるときには、一緒にお料理したりミシンがけしたりしているのをSNSに殊更アップしたりして、「子どもたち、元気に育っているから、大丈夫だから」みたいなことを発信しているんです。それでも、「ああしたほうがいい、こうしたほうがいい」と言ってくる人はいます。心配してくれているのはありがたいけれど、かなりステレオタイプな「べき論」を言われることは多くて、困ったな、と思うことはあります。子どもが小さかった頃は、仲の良い友達に絶交されるくらいの勢いでしたけど、すすく育っているので、「まあ、結果大丈夫だったね」みたいな感じで、いまはそういう外圧は減りましたけどね。

久保田　相澤さんは相澤さんでそういう外圧と戦っているんですね。さっきロビンズさんが「ブレない」と言っていたのは、そういうところですよ。意外に私たちは外圧に弱いかもしれない。

相澤　忙しくて変えようもないんですよ。私は自分がやりたいことがたくさんある人なので。それって結果的には何十年後かの子たちの未来を創ると思っているんですよ。そんな押し付けがましいことは本人たちには言わないけれども。

自分が生まれてきたのって、生き物として命を未来に繋いでいくという役割があるからだと思っているので、子育ても仕事だと思っているんですが、ただフルタイムではない。子どもたちと365日一緒にいれなくても、彼女たちはしっかり自分たちの生を全うしていけると信頼しているということですね。

久保田　みんながそう思いだすと、楽な社会になる気がしますね。今まで相澤さんが感じてきた外圧と私が受けている外圧は、ほぼ一緒なんですよ。ただ、障害がある人の場合はそれが永遠に続くんですね。自分から離れていけないから。「親亡き後」という言葉に象徴されるように、「私がずっと面倒を見なければいけない」「私が死んだら、この子はどうなるんだろう」というのがんじがらめにされるんです。それを跳ねのけられなかったのは、やっ

ぱり私の中にも家族のステレオタイプがあったから。でも、親がもっと自分の人生を生きても、子どもたちは不幸にはならないんじゃないかと感じているんです。『たけしと生活研究会』をやっていて、自分のこれからのことを考えているんだなって思うんですよ。

相澤　そうなんですよ。壮くんのことを考えているというよりも、自分のこれからの生き方を考えている。「翠と生活研究会」かもしれない。

久保田　本当にそうなんですよ。だから、みなさんにも共通するものかもしれない。子どもって絶対巣立っていく存在だから。なかには「子どもは自分の人生の一部」と思っている人もたくさんいて、そういう人たちから子どもを引き剥がすのは、意外と酷なんですよ。でも、やっぱり別れなければいけない時もやってくる。

参加者1　うちは息子が3人いて、真ん中の子は小学校5年生から中学校3年生まで不登校だったんですが、当時、社会が求めるステレオタイプのな家庭像に苦しんだこともありました。でも、子どもは育つもので、31歳、29歳、24歳になったので離れました。私はアーティストなんですけど、いま自分の制作のことや今後の展望などを考えると本当に心許なくて、「私はいったい何だったのかな」と悩むことが多いんですよ。でも、ひとつだけ、これはやったかなと言えるのは、子どもを3人産んだこと。そこをいちばんにしてきたわけではなくて、必要に迫られてやってきたわけだけれど、結局そこか思っているところです。

　家族像もライフステージに応じて変化していきますよね。いまの私は、卒業したはずの元の家族、認知症の母や障害者の姉の世話をする娘や妹になっています。

相澤　いろんな仕事をしていますが、私も、自分がちゃんと役に立てたのは子どもを2人産んだことくらいだという感覚はあります。あとは子どもたちが自分たちの足で歩いて行って、彼女たちも子どもを産む選択をしてくれたら、応援できればいいなと思っています。もちろん、産めない方もいるし産まなくてもよくて、それが全てではないけれど。

参加者2　障害のある娘がアルス・ノヴァに通っているんですが、私の場合は困り果ててこの場を利用しましたんですね。主人の仕事が忙しくて、趣味にも没頭する人なので、家にはほとんどいないんです。以前は実家を頼っていたんですが、母が若く亡くなってしまったので、自分でやらなきゃいけない状態になって。ちょうどその頃に障害福祉サービスができたので、すぐ飛びついて使えるものは全部使っています。すごく助かるんですが、周りからは「お母さんが見られるんじゃないの？」という声もありました。いまでも、私の周りには福祉サービスを使っていない人が多いんですよ。なぜ使わないのか聞いてみると、旦那さんが見ているとか親が元気だからと。実際、困らないと変わらないだろうと思います。

　それから、娘が家でじっとしていられないタイプなので、外に連れていくんですが、親に対しては周りの視線がすごく厳しいんですよ。でも、あるときから介護札を付けて出るようにしました。「介護中です」ということを知らせる札で、それをつけていると、例えば異性でもトイレ介助ができたりするんですが、遠出するときにそれを下げていくと、周りは「頑張ってるね」「応援してます」という反応になるんです。娘が走り回っていても、「あの人、ヘルパーさんかしら？」という目で見てくれる。

相澤　なんで、親にだけ厳しいんですかね？

参加者2　やっぱり面倒を見て当然ということなんでしょうね。ヘルパーさ

んにも「この日、お母さんダメなんですか？」とか「きっとお母さんと行きたがっていると思いますよ」とよく言われるんですが、私も行ける時は行っていて、行けないからお願いしている。それに、娘はもう28歳なので、いつまでも私が見ているのは不自然。距離感がよくなって、すぐ揉めるんですよ。こないだ、私が娘のリュックを勝手に開けたら、娘が怒ったことがあって、ドキッとしたんですよ。24歳の下の子のリュックは絶対開けないなと思って。そのとき、私もそこから変えていかないとダメなんだなと思いましたね。

久保田　困ってないからって言うけれど、私から見たら、「このお母さん、どうやって生活しているんだろう」と思うような状況になっていて、実際は困っているのに、福祉サービスを使ってない人が多いんですよ。我慢したり大変なことに慣れすぎてしまっているんです。

相澤　障害の有無に関係なく、子育てで困っている人はたくさんいますよね。マンション住まいの核家族で、聖母マリアのようにならなきゃいけないという庄のなかで、結局虐待してしまうような状況になっているお母さんがたくさんいると思うんですけど、「助けて」と言えない。この「自己責任」というのが窮屈ですね。

外圧から解放されるには？

参加者4　多くの人が定住して定職について家族をつくって暮らすというのをやっているけれども、必ずしもみんながやりたいことではない。他のところに動きたいとか、バラバラになって動きたいというときに、経済的なことは考えちゃいますね。それから、子どもの学校の手続きが面倒だとか。そのへんもクリアできて、やりたいと思えばできるのであれば、いちばんいいと思う。　そういうことをやろうとしたときに、「家族」のいろんなかたちが見えてくるという話が面白いと思いました。世間一般の「血縁の家族」と違うものをやろうとすると、「外圧」の話もありましたが、それを許してくれないものがあったり、邪魔が入ったりするんだと。外側からの「家族たれ」という呪縛が全くなければ、内側からそうじゃないかたちを取れるんじゃないかと思いました。相澤さんは、世間の常識とか外圧に困ったことはないんですか。

相澤　我が家に集まる人たちは、建築、編集、デザイン、アートとか、クリエイティブな活動に携わっている人が多くて、あまり揉めたことはありません。近所は回覧板が回ってくるような古い町会なんですけど、近所の人も遊びにくるので、特にないですね。一度、大騒ぎしていたら警察が来たことはありますけど。

久保田　この前、面談に行ったら「お母さんもうちょっとお家にいてあげてください」と言われたって言っていましたよね。

相澤　はいはい。高校の三者面談で。「ご家庭のことには口出ししたくないんですけど、一応、受験生なので」って先生が言葉を濁すんで、一応、謝っておきました。

　こないだ出張に行っていた時に、12時頃、小学校から電話がかかってきて「お嬢さん、まだ来てないんですけど。今日どうしました？」って。たまにあるんです、寝坊。お父さんは朝早く家を出ちゃって、お母さんはずっと行ったきりで、寝坊したことに気づいてふたりに電話したけどつながらなくて、学校にも電話できなくて、そのまま家でぶらぶらしていたらいいですね。無事がなかったので、学校に電話して謝ったんですけど。その話を夫にしたら落ち込んじゃって。私より常識がある人なので、申し訳なく思ったんでしょうね。それが私には不思議。「元気だし、全然大丈夫だよ」って言ったら、一緒に出張していた人が「なんかすごい家だね」って言うんですよ。私はその自覚がない。

だから、外圧はあったけど私が気づいていないだけかもしれないですね。

参加者4 結婚はしていて、戸籍上は整っているんですね？

相澤 はい。旧姓で仕事していますけど、一応整っています。真っ当に結婚して子どもができて祖父母とも仲良く付き合っています。

でも、私、絶対こうじゃなきゃいけないというのがあんまりない。仕事でもそうなんですよね。だから、私の提案と違う提案が出てきても「いいね」という感じで。そういう意味では私もすごいブレてるんですよ。こうじゃなきゃいけないというのはあまりない。

参加者4 外圧に気づかないのはスキルだと思うんです。ご主人が気にしていたと言っていましたけど、気にする人同士だといろんなことが聞こえちゃって、維持しにくくなっちゃうのかもしれない。

ロビンズ さっき外圧に気づいてないとおっしゃっていたけど、そうじゃなくて「それはたいしたことではない」という判断がちゃんとできているんだと思うんですよ。謝るところは謝って、でも気にしない。

相澤 そうですね。例えば、先生に心配かけたことについては謝るんですよ。でも、彼女が寝坊して家に無事であるなら、それでよくて、学校に迷惑をかけたからって叱ることはないわけですよ。

参加者5 相澤さんはアクティビストのお父さんとお母さんが強烈だったから、ちょっとしたことはあんまり気にならないんだなと思いました。それはある意味ギフトですね。

お話を聞いて思ったのは、「こうしなければならない」というのを自分自身が感じているから、それを受信しちゃうんだなと。「こうじゃなきゃならない」とか「人に良く思われたい」という自分自身の思いが外圧になる。そこから解き放たれないと自由になれないと思っています。

相澤 「こうじゃなきゃいけない」がなくなったらどれだけ楽か。みんなと仲良くできるから。「北風と太陽」ってあるじゃないですか。ビュービューってやるよりは、ぼかぼかっしていたほうが圧倒的に生きやすい。

参加者3 外圧を気にせず「元気で生きていればそれでいい」という判断できる感覚はいいと思う一方で、相澤さんがそう考えられるのは育った環境の影響もあるから、自分自身がそうなるかというのと難しそうです。でも、特殊な例で終わらせてしまうと変われないので、そこから先を考えたいのですが、外圧に敏感に反応して影響を受けてしまう自分としては、外圧への対処の仕方考えたいテーマだなと思いました。あと、血縁関係はないけれど一緒に住む相手として、外圧的な反応をしてくる人とは一緒に住みづらいだろうな考えると、誰でもいいわけじゃなさそう。暮らしはじめた後になって、例えば「あなたは母親なんだから、ちゃんと面倒を見なさい」というようなことを言われて傷つくこともあるだろうし。それから、街のいろんな人が「私と生活研究会」をやって自分の生活や家族のあり方について考えていったら、外圧的な考え方も変わっていくんじゃないかと思いました。

子どもから見た親との関係

参加者3 僕は大学院生でふらふらと迷っている感じなんですけど、さきほど久保田さんが、「たけしと生活研究会」と言いつつ自分のことだと言っていたのを、私も自分の生活をこれからどうしようと考えながら、共感して聞いていました。

僕の場合は、両親と兄がいて、割りと従順な次男として育ちました。そんなに衝突もなく穏やかなように思うんですが、振り返ってみるとつながりの弱さを感じることもあります。互いのことをどれだけ理解しているんだろうとか、言いたいことを言い合える関係の希薄さを感じるというか。複雑な話になると、向こうも言葉を濁して気まずい雰囲気で会話が終わってしまうようなところがあります。

みなさん今日は親の立場でお話されていましたが、以前はみなさんも子どもで、親との距離感を計りながら自立してきたのかもしれないし、今も完全に自立しているわけではないんじゃないかとも思う。子どもの頃は、親とどういう距離感を取ろうとしていたんでしょうか。

ロビンズ 　うちは商売をやっていて、夜遅くまで両親が働いていたんですよ。居候している職人さんも含め、家には人がいたんですが、兄と私の相手をする人は誰もいなかった。中学生くらいまでは放置されていたので、話をした記憶もないんです。でも、バブルが崩壊して商売が暇になって、いちばん放っておいてほしい高校生くらいから急に干渉しはじめたのが鬱陶しかった。それまで11時くらいに夕飯を食べていた家なのに、急に「6時に帰ってこい」とか言いだして。それに反発して猛勉強して家を出た記憶があります。

相澤 家族と言っても全然違う人格ですよ。親子だから腹を割って話せるというのは誤解だと思うんですよ。自分の親とあまり腹を割って話せなくても、よそに話ができる友達がいたりするわけですよ。だから、親だからという期待は持たなくていいと思うんですよ。「親子なのに話ができない。僕の家族環境はどうなんだ」という心配は全くする必要がない。「今まで育ててくれてありがとう」と感謝こそすれ、「ちょっと性格の違う人なんだな」くらいの感じでいいんじゃないかな。私は父とは議論しないです。父はチェ・ゲバラのTシャツを365日着ているようなアクティビストなので、話しはじめると大変なんですよ。だから、なるべく当たり障りのない会話で済ませたい。友達になるのはちょっと無理、ましてや夫としてなんか絶対無理、親子であっても長く一緒にいるのは難しい父です。

両親は離婚しているのですが、ふたりとも「世界平和を願って」みたいな大きな方向性は似ているんですけど、細かなやり方とか考え方とか、育ってきた家庭が全然違うわけで、たまたま一瞬一緒にいただけだと思っています。そういう意味で、子どもから親に何か期待するということはほぼない。無事に元気に生きていってくればいいかな。

久保田 　私の母は自分の意見をはっきり言う人なんです。それに、子どもを3人ちゃんと育てたという自信を持っている人で、「ちゃんとやりないさい」とたくさん言われたんですよ。でも、母は意外にアーティスト気質で、言っていることがめちゃくちゃなことが多い。感情的なところもたくさんあって思ったことを全部口に出すんです。人間、歳を取れば取るほど、好きなことをやっていくんだと思うんですが、母は片付けが好きで、お庭を綺麗にするのが大好きな人なので、それをやっていると一日が終わるので、どんどん人の縁を切っていっているんです。友達にはもう会わないとか。

私もそういう性格を受け継いでいて、細々したことをやるのが好きだし、片付けも好きだし、引き込もろうと思ったら引っ込んでしまうんですよ。たけど、それだと私は幸せになれない気がしています。だから、少し汚いことを容認するとか、片付けしないとか、人がわけわかんないことやっている時にいちいちチェックしないとか、そういう術をちゃんと身につけて、家族以外の人と関係をつくっていきたいなと思っている。そのためには、社の母という役割をやっていると余裕がなくなるので、まずはそれをやめてみたいというのが正直なところ。自分が生まれた家族は見本のひとつだし、その影響を受けているけれども、「こういう生き方もあるなあ」くらいに思って、違う人生を歩むことはいくらでもできると思います。

血縁家族以外と暮らすことの可能性

久保田 　レッツにもシェアハウスに住んでいるスタッフがいますが、分かち合いながら生活することを志向している人たちはたくさんいる気がしています。「たけしと生活研究会」でも、福祉制度は利用するけれど、それはそれとして、お互いに提供し合いながら楽しく生活できないか考えたいんです。そんなわけで、血が繋がっている家族以外の人と一緒に住むことに対して、みなさんはどう思っているのか聞きたい。

ロビンズ 　子どもが生まれる前にアメリカから日本に帰ってきたんですけど、浜松ってブラジルの人が多いので、ブラジルの人と一緒に生活してみたいなと思っていた時期があったんですけど、そういう人は見つからなかった。今でも家を出たいなと思っているんですが、夫は出たくないとやっているから、子どもを連れて3人で出ちゃおうかなって思っていて。引越すのだったら、関東とか長野とか、浜松以外に行ってみたい。町に飽きちゃったんですよ。あと、子どもがよく学校で怒られるので、もうちょっといいところないかなと。でも、3人で暮らすのは経済的にも大変だし、誰か一緒に暮らす人いかなと本気で思っています。

久保田 　そういうのがフランクにできるのも大切かもしれないですね。相澤さんの話を聞いて、家族って一緒にいなくてもいいんだって思ったんですが、ロビンズさんは、ひとりで出ちゃうのはだめなの？「出ちゃう」と言うと別れるみたいな言い方だけけど、ちょっと出てまた戻ってとか。

ロビンズ 　「やってみちゃえ」っていう人生できたんだけど、子どもが生まれてから「やってみちゃえ」が引っ込んできちゃって。でも、またやってみたくて。うちは家族別々に住むようになる気がするので、老後どうしようって考えるんです。そうすると、私ひとりになるけど、経済的に無理だなんて。友達と一緒に住むとか、同じ世代の人たちだけで暮らしたくはないので、小さい子もいたら楽しいだろうとか、考えました。それに向けて研究していかないとなって。

相澤 　うちは私がたまにしかいないから、いるだけでありがたがられますよ。こないだ、普段はやらないのに、受験勉強している娘に紅茶をいれてあげたら「お母さんありがとう」って感動されました。

ササキ 　レッツの職員のササキです。家族観や生活観は自分が育った家庭の影響を受けるとすると、他の誰かの生活圏に入っていく介護って、まさに僕がレッツでやっていることですが、自分が言葉にすら出さないほど当たり前と思っていたことが揺さぶられるチャンスだと思うんですね。ある当事者性を持って、誰かの生活の中に入っていくというのは、自分の家族観をぶち壊す、踏み直すきっかけになりえるんじゃないかって。だから、街の人が壮くんの生活に関われば、「生活研究会」的な考えを持つチャンスもありますよということもできると思うんです。でも、まだ、久保田さんの顔色を伺っているんですよ、僕なんかは。びびっているんですよ。その先に、「壮くんの生活、もっとこうしたほうがいいんじゃない」とか「いや、僕の考えはこうだけ」ということをガンガン言い合える場になっていけば、外圧というか、みんなが「こうすべき」と思っていることをお互いに崩したりつくり直したりできる場になるんじゃないかと思います。

相澤 　久保田さん、レッツを辞めたら？

久保田 　私にとってレッツは壮なんですよ。だから、辞めるかどうかは別としても、それどころじゃない。私は私のことを考えないといけない。社がい

る人生の組み立て方しか私は知らないから、彼がいつまでもいると自分のことが考えられないですよ。外圧もへったくれもなくなくて、誰も面倒見てくれない状態だから。ヘルパーさんが9時までだったら、絶対に9時までに帰らなきゃいけない。話が盛り上がりって午前様になっちゃった、みたいなことは許されないですよ。それを何十年やってきて、この不自由に辟易しているんです。私はちゃんと飲みに行ったり弱みを見せられる友達をもう一度つらなきゃいけない。

参加者6（レッツスタッフ） 　この前、壮くんがヘルパーさんに爪を切ってもらっていたんです。爪を切るってすごく親密な行為だと思うんですが、いろんな人とそういうふれあいがあって羨ましいな、豊かな人生だなと思ったんです。久保田さんも、親という役割から解放されて自分の人生を見つめ直すというのは本当によいことだと思います。私はレッツに入ってまだ日が浅いですが、利用者さんの中には、20代後半とかになってくると、世界がちよっとずつ広がってくる人たちがいますよね。そろそろ、親との関係じゃなくて、自分自身で自由と引き換えに責任も取って自立するほうが、彼らの精神衛生上も豊かなんじゃないかと思うことがたくさんあります。だから、こういうのが広がっていくといろんな人にとっていいんじゃないかと思います。

ロビンズ 　私、この風をもっと浴びなきゃいけないなって考えています。外の風は浴びているほうだと思うんですけど、家の中はどんなのかなと思うと、けっこう不機嫌でいたりするので、ちょっとひっくり返したい。子どもが小さい頃に、他の人と住みたいと思って、でも相手が見つからなくて。実際にやれている他の人を見ていいなと思っていたけれど、私も今からでも間に合うっという気持ちが大きくなってきました。

相澤 　いままで建築家として家の話を聞かれたことはありましたが、もっとベタな生活の部分をこんなに赤裸々に話したのはたぶん初めてだし、楽しかったです。よかったら遊びに来てください。久保田さんはぜひうちに住みに来てください。レッツに1ヶ月くらい久保田さんがいなくても大丈夫ですかね？

ササキ 　全然問題ないです。戻ってきて、すごい怒られそうですけどね（笑）

相澤 　怒らない人にして返しますんで（笑）なんていい人ぶっていますけど、久保田さんが来たら、家の中きれいになるかなとか、子どもの相手してもらえるかなとか、いろいろ計算高い性格なんですよ。でも、本当に、久保田さんのこれからを楽しみにしています。

<div><div></div>GUEST PROFILE</div>	
<div> <div>相澤 久美</div> <div>建築家、編集者、プロデューサー</div> </div> <p>p.49参照</p> <p>.....</p>	
<div> <div>ロビンズ小依</div> <div>ミュミュ・ワークショップ主宰</div> </div> <p>浜松市出身。米国滞在、国際結婚を経て2012年ミュミュ・ワークショップを設立。自分の住みたいまち実現のために多様な人・物事に手当たり次第興味を持ち、身の回りの多文化化を実践中。</p> 	

アサダワタルさんに聞いてみる！

生活と表現とシェア

Ask Wataru Asada about the life, expression and sharing

自宅などのプライベートな空間を外部の人に少し開く「住み開き」の提唱者であり、音楽をはじめとした表現を通じて、人や街の記憶を呼び起こし、共有するアートプロジェクトを各地で展開するアサダワタルさん。

住まい方そのものに表現を見出し、さまざまな背景を持つ人の生活に表現的にアプローチするアサダさんに、人と人がつながり、生活がシェアされていく場のつくりかたや、そのような場における表現の役割についてうかがいました。

Mr. Wataru Asada is an advocate of an "open living room" that partially opens private space in a home to outside people. He develops art projects in various places; these projects evoke memories of people and towns through music and other expressive means. Mr. Asada finds expression in the way we live and he approaches the life of people with various backgrounds in an expressive way. We asked him how we can create the spaces that can connect people and support their sharing of their lives. We also asked about the role of artistic expressions in those spaces.

ゲスト アサダワタル (文化活動家)

聞き手 高林洋臣、久保田翠 (認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ)

Guest: Wataru Asada [Cultural Activist]
Interviewer: Hiromi Takabayashi, Midori Kubota [Approved Specified Non Profit Organisation Creative Support Let's]

アサダ 僕は大阪生まれ大阪育ちで、20代半ば頃まで主に音楽をやっていました。24歳でNPO法人ココルームに出会って、スタッフをしながら大阪府西成区の釜ヶ崎とか新世界と呼ばれるエリアで、音楽や演劇や紙芝居を通じてアクションを起こしていく活動をはじめました。そして、障害のある方や壮絶な人生を生き抜いてきた地元のおじさんなど、いろんな背景を持った人と、バンドに限らずいろんな表現活動をするようになりました。地域やいろんな分野に関わって、アーティストだけではなくいろんな立場の人が協働しながら表現活動することで、コミュニケーションが生まれていくようなことをアートプロジェクトと言います。当時はそんな言葉も知りませんでしたが、アートプロジェクトを企画演出することが自分の表現だと思うようになりました。

30代以降は、東京、滋賀、福島、青森などに一時期滞在しながら、市民と一緒にプロジェクトを行なっています。空き家を活用して一緒に場をつくったり、福島では復興公営住宅に毎月通って、自分の町に帰れなくなった被災者と一緒にラジオ番組をつくったり。障害のある方と一緒に表現の場をつくる仕事のご縁で、品川区に新しくできた施設にも関わっています。

演奏するとかCDを出すのと比べて、こういう仕事はつかみどころがないんですね。参加者となら時間や場を共有できるのですが、その場でしか起きないことをどうやって広く伝えるかずっと考えてきた結果、本を出版する機会をいただきました。20代後半に、仲間とシェアしていた自宅をいろんな人が出入りできる状態にしていく活

動をしていて、住んでいる場所を開くので「住み開き」と名付けました。そしたら、どうやら同じようなところが各地にあるらしいんですね。他の人のことを知ったらもっと面白いやり方ができるかもしれないと思って、訪ねて行って家の面白い開き方を取材しました。彼らは、家を劇場にしたり、自分の趣味の博物館にしたり、絵本文庫にして子どもに開放したり、屋上に菜園をつくって地域の人に開放したりしていて、それはその人の住み方なりの表現なんじゃないかなと思ったんです。この本がきっかけで、自分がやっているアートプロジェクトについても本を書いて出版を通じて伝えていけたらいいなと思うようになりました。

そのうち大学の仕事(教員業や研究業)もやりだして、現在は、いろんな人と混じりながら現場をつくることと、それを伝えるために執筆したり大学で仕事をすることをぐるぐる回すといった感じです。僕にとっては、コミュニティと関わることは生活そのもので、どう面白いアクションを起こせるかということを考えています。家族とも生活実験をしながら東京と新潟の二拠点生活を送っています。

「住み開き」から生まれる新しいコミュニケーション

アサダ 2009年7月18日～8月30日まで1ヶ月半かけて、「自分だけの場所をみんなのための場所へとちょっとだけ開く。そんな楽しいひと手間についてちょっとだけ考えてみませんか」ということで、大



阪市内の自宅を開いている場所をまわる「住み開きアートプロジェクト」をディレクションしました。はじめは、2006年～2009年まで関わっていたマンションの一室「208南森町」でした。ここで仲間6人とホームパーティーやトークイベントや予約制で鍵を貸し出して入ってもらった展示会などをやっていました。当時、僕は大阪市の文化事業に関わっていたのですが、行政の仕事というのは制約があります。それを乗り越える面白さもありますが、息が苦しくなるときがあって、小さくていいから自分たちの好きなことをやる場所をつくりたいと思って、仲間と家を開放していたんです。

イベントスペースのようなことをするのなら、よほど大きな家でないと狭いし、大きな音も出せないし、プライベートを脅かされる可能性もあります。でも、この家を開いて面白かったのは、人のふるまいが変わるということ。本当に住んでいる家なので、エプロン姿で出て行って、みんな席を分けずにぐちゃっと座って、何か飲んだり食べたりしていると、いつの間にかトークイベントが始まっている、というようなことを意識的にやっていたのですが、僕が当時いくつか場を開いていてどうしても超えられなかった壁、つまりお客さんと迎える側という役割が、家という空間だとい意味でルーズになっていったんです。例えば、ケーブルがなくてプロジェクターが映らないときに、公共ホールのイベントだったら、「不手際だなぁ。お前ら何やってんだよ、お金とってるのに。早くしろよ」と思うお客さんがいると思うんですよ。でも、こういう場では手伝ってくれる人が出たりするんですよ。迎える側も弱みを見せられることで、徐々に線引きがなくなって場が柔らかくなっていて、みんながこの場をつくっている感じになっていく。

家を開いている人たちは、もともとは場所を借りるお金がないから家でやりはじめたということなんです。家だからこそそういうコミュニケーションが起こるよね」という話をしてみると、確かにそうかもしれないと関心を持ってくれました。そして、一度ここを味わった人の中には、生活の延長線上で自分でもこれくらいだったらできるかもしれないと、実行に移す人も出てきて。それを見た時に、これ

が世の中に広がったら革命的なんじゃないか、みんなが小さい場をつくったら最強なんじゃないかと思ったんですよ。最小でいうと2畳で「2畳大学」という定員5人くらいの空間をやっている梅山晃佑くんという友人がいます。彼はいま引越して、ちゃぶ台を持って路上に出る「流しのこたつ」というやり方でも2畳大学を続けています。

こういうことをすると、コミュニケーションという意味でも鍛えられるし、どこで開いてどこで閉じるかということもわかる。個人をどれだけ他人に開いたり閉じたりするかという塩梅が如実に場に現れる。これは表現だと思って「住み開き」を提唱し始めました。僕自身、滋賀の長屋に住みながら家でパーティーしたりご近所さんと呼んだりしつつ、いろんな住み開きスポットを取材させてもらって本にまとめました。

この本をまとめたのは2012年なんですけど、最近、最新の事例を追加した文庫本を書いています。特に面白いのが群馬県の「たむろ荘」。当時、群馬県立女子大学の学生だった本田美咲さんたちがやり始めたところで、ボンビーガールという番組にも出ていました。築40年くらいの空き家をシェアハウスにするために借りようとしたら、住めないと思うからと断られてしまって、交渉して30万円で買い取ってしまった。2階に群馬女子大の関係者が平均して3、4人住んでいて、もともと店舗だった1階を開放して、トークイベントや上映会などをやっています。

たむろ荘の理念、これがかっこいい。「居ること自体に料金が発生するシステムばかりが増え続け、無意味にたむろすることが困難になりつつあります。たむろ荘はそんな時流に逆らい、人が自由にごちゃごちゃする場として生まれた大喜利みたいなスペースです」とあって。彼女たちは大学時代にアートマネジメントを学んでいるんですが、「仲のいい人たち同士で生活したって面白くない、呼んでもいない人が勝手に来てお茶を飲み散らかしていくみたいなことが日常で起きないと全然面白くないし、頑張っていないと思う」と言っていて、その時点で相当面白いでしょ。だから、「ごちゃごちゃ」が起きるようなコミュニケーションをどう日常生活で生み出すかということ、かなり意識的にやっていて、わざと場を曖昧にしている。当時、まちづくりや地域活性という文脈でニュースに取り上げられたんですが、本人たちは拒否こそしないけれど、全くそういうふうには思っていないんです。助成金の誘いもあったらしいんですが、その文脈に染まってしまうので全部断っているそうです。何かに偏ったり何かの目的に回収されないように、「何やってんの、この場所」とずっと言われ続ける大喜利みたいな場をやることに命をかけていると言っていて、すごいなと思いました。

実践レベルでは混沌と曖昧なことがあるんですが、僕も話したり書いたりするときに伝わりやすい文脈で言葉にすると、だいぶ薄まる部分もあるので、葛藤します。今回取材してみて、そういう現場をやる

きに、意味や目的がひとつではなく、いろんなものが混じってる曖昧さ、ルーズさ、いろんな人たちが間違っ入り込めるような、間違っことが起きてしまうようなノイズ、余白が場にたくさんあることは大事だと、あらためて思いました。

音楽を介して被災者の生活に 寄り添う「ラジオ下神白」

アサダ 最近は復興公営住宅に訪問するという活動もしています。福島県いわき市小名浜下神白^{しもかじろ}に2015年にできた団地で、帰宅困難区域を含む富岡、大熊、浪江、双葉の4町の方々が6棟に分かれて住んでいます。ここでコミュニティづくりに関わる機会をいただきました。

「ラジオ下神白 あのときあのまちの音楽からいまこへ」というプロジェクトで、一緒にプロジェクトをやっている小森はるかさんが撮ってくれた10分程度の動画がyoutube (*1)に上がっています。

今まで大きな田畑があるような地域に住んでいた人たちが、初めて集合住宅に住むことになり、どう人となつなげるかがずっと課題でした。集会所に人が集まっているんですが、来れない人も多い。来れる人が常連化していくと、他の人が入りにくくなる。いろんなタイプの人が交わるにはどうしたらよいか。来てもらう人を増やすという発想よりは、家に訪ねて行ってつながりをつくれるような仕掛けがあればいいんじゃないかと思って、ラジオ番組をつくろうと思ったんです。

それぞれが自分の住んでいた町の思い出を語って、他の人がそれを聞いた時に、何号棟の何々さんはそういう方なんだということがわかってつながっていくような、団地の中だけで聞くことができるラジオ番組です。ただ普通に話をすると震災体験に直結する可能性もあって難しいので、音楽を挟んで、感性に訴えるという表現的にアプローチすることによって、個人の面白い部分が見えてきたらいいなと思っています。毎回住人の方3~4人に取材して、これまでに約



*1 「ラジオ下神白 あのときあのまちの音楽からいまこへ」ドキュメント
<https://www.youtube.com/watch?v=jqThaSNgRuo>

75分の番組を第6集までつくりました。電波を飛ばしてラジオで聞いてもらうのが物理的に難しかったのと、訪問するきっかけがほしくて、ラジオ番組を入れたCDをつくっています。例えば、第1集は「常磐ハワイアンズセンターの思い出」ということで、浪江の3人の方に話を聞きました。第2集は「あの頃の仕事・家族の風景」ということで、大熊のご夫婦、富岡と双葉の単身のおふたりとか、町ごとに聞いていきました。団地を出られた方といま住んでいる方をつなぐ「さよならの代わりに」という特集もありました。CDはこの団地限定で全戸を回って配布しています。配布するときには、リクエストカードを持って行って、リクエストに応えるかたちで「取材しに行っていないですか?」というふうにして次の方が決まっていきます。

その中でも特に付き合いが深くなったのが、ヨコヤマケイコさんという方でした。「青い山脈」をリクエストくださった方です。いま90歳なんですけど、実はこの世代では珍しく40歳まで独身で東京に出ていて、英語をしゃべりたくて、アメリカ軍の駐屯地の喫茶店とかアメリカ軍のベビーシッターとして働いていた。その喫茶店で聞いた「青い山脈」が大好きだったという思い出から、記憶が戦後とか子どもの頃とか、いろんなところに飛び交う。その人そのものや背景が見えてくるお話でした。95歳で最高齢のタカハラタケコさんとも毎月交流しているんですが、彼女と先ほどのヨコヤマさんは「青い山脈」でつながりました。ふたりともこの曲を聞くので、「これは誰のリクエストなんだろう?」というかたちで、曲や思い出を通じてつながったんです。そういう人の出会いを意識しながら、音楽アルバムをつくるように、ラジオをつくっています。

話は逸れますが、7年前に、借りて返せなかったCDを100枚展示する「借りパクプレイリスト」という企画をやりました。全部ポップが貼ってあって、返せなかった理由が書いてあります。これが今さら新聞で取り上げられました。「音楽の力」という特集で、しかも「記憶がつなぐ人と人」と書かれて、こそばゆいんですが、でも実際、先ほどの「青い山脈」でも、ヨコヤマさんとタカハラさんは、違う思い出を持っているけれど、つながった。「借りパクプレイリスト」では同じのが3枚出してくれば、当然3人ともエピソードは違うわけです。このポップに書かれていることは、音楽を聞く分には要らない話で、音楽性とは無縁なんだけれども、僕はやっぱり、生活とか背景とか文脈を持って聞くと、同じCDが同じCDじゃなくなるんだと思う。

下神白でも、家を訪ねて生活の中に僕らが入り込んでいく時に、音楽という手立てがあることで、3年やっているとずいぶん認知されてきて、CDを受け取ってくれたり家に入れてくださる方が増えてきました。怪しいものは怪しいので、もちろん「けっこうです」と言う方もいますけど。そんな中、「実は団地を離れることになったんだけど、これからもラジオCDって送ってくれるの?」という相談を受けるようになりました。団地を出て元の町に戻られた方もいれば、悩みなが

らも新しい土地に家を建てる決断される方、ここを終の住処にするかどうか悩まれている方もいて、そういう方々と交流しながらやっています。

人々の生活にアクセスする 手立てとしての表現

アサダ このプロジェクトでは、団地の生活に僕ら外部の人間が入って行って、音楽を通じてコミュニティをつないでいくわけですが、その時、僕は支援している感覚ではないんですよ。というよりは、音楽を通じてその人の人となりを感じるライブ感がある。彼女たちがニュースで紹介される時は必ず「被災者」というくりで紹介されます。でも、僕はそういうことは聞かないし、わざわざ音楽を挟むことによって、直接被災の話ではなくて、いろんな回り道をして曖昧な領域を行き来して、その人の生きてきた雰囲気を受けとろうとする。こういう出会い方って表現活動だからできるんじゃないかなと思ったんです。そして、僕らが出来たのだから、東北や被災地に関わりたけれど行ったことがない人たちがいるとしたら、そういう出会いのチャンネルとして、ラジオ下神白は使えるんじゃないかと思ったんです。そう思ってやったのが「報奏会」というイベントです。東京で関心がある方に来てもらって、レコードを流すのもアナウンスも全部その場でやりながらラジオごっこのようなことをして、団地の住民の声を聞いて「この人どんな人生なんだろう」と想像する。そして最後は「青い山脈」をみんなで歌いました。

その中から次の展開として「伴走型支援バンド」を結成しました。これまで僕は生演奏をあえて避けてきたんです。生演奏をしようとして音楽が勝ってしまっ、「音楽ってすごい力があるね」「みんなで楽しかったね」という話になりがちで、それはちょっと違うんだよなというのが自分なりにあって、地味にラジオをやってきたんです。でも、いよいよ住民さんとの関係性できて、「青い山脈」といえば誰々さんというように、住民同士で曲ごとの思い出が共有されてきたんです。なので、その曲を東京でバンドがカバーして、団地に演奏しに行ってみてみんなで合唱するというプログラムを今やっています。バンドメンバーの募集では、どうしてこのバンドで被災地に行きたいのかを書いてもらって、面接では演奏をしてもらうんですが、技術を見るのではなくて、本人にとって音楽とは何かということを語ってもらいます。「現場との出会いのためのバンド」なんですよ。生活に入っていき手立てとして、こういう表現は使えるんじゃないかと思っています。

僕がこのプロジェクトを通じて思うのは、支援しに行っているように見えるけれども、実は現場から受ける影響が相当大きいということです。最初は支援しに行くきっかけが得られると思っていたメンバー



も、「自分たちが面白かった」「行けてよかった」と言います。そこが大事だと思うんです。福祉の現場でも僕は同じことをいつも思っています。自分たちが何かしてあげるという話ではなくて、自分たちが面白いと感じられる現場が山ほどあって、いろんな背景を持っている人の生活に、よいかたちでアクセスする手立てとして表現があるのだと思います。

DISCUSSION

高林 ラジオに出る人も聞く人も団地の住民ということで、団地内で表現が行き来しているのは、無理に表現が崇められてない感じでいいですね。私たちの活動は「障害者」という言葉が勝ってしまっ、なかなか他の部分に焦点が当たらなかつたりします。音楽というクッションがあることで、その人個人の深いところや情みたいところで繋がっていくというのは、面白い事例だと思います。ただ、音楽をやりすぎると音楽が勝ってしまうということで、塩梅が難しいですね。

アサダ 表現って、やればやるほど表立って強度を持つので、それと日常生活をどう行き来するかということは、住み開きをやっている時からずっと考えていました。派手であればいいというものではないし、かといって何もやらないと生活そのものとしか言いようがないようなものになっていく。舞台上上がっていく感じと、舞台から降りているんだけど、この「間」にこそ大事なものがあって、この「間」を常に考えています。

参加者1 昨年、次女の企画で、家を開放して障害のある長女の作品展をやったんです。次女がどうしても家でやらなきゃ意味がないし、作品だけを飾ってもしようがないと言って、家族を全部出しちゃう企画をやったんですが、いろんな人が面白くなって来てくれたんですよ。みんな、家族そっこのけで話していて、お客さん同士で仲良くなっていくし、勝手に入ってきて勝手に帰るみたいな感じで。あまり

にも人がたくさん来すぎて、お客さんが案内していたりとか。

アサダ 面白いですね。僕がプロジェクトをやっている、いつも思うことでもあるんですが、住み開きをしている方の中には「何もやらないのが究極の理想」と言う人や、1割は計画を立てても9割は余白を残しておくと言う人がいます。場が出来上がってくると、家主が途中で席を外して寝ちゃっても勝手に回っていくというようなことがある。ここは誰々さんの家だということはわかっているんだけど、みんながそのことをいい意味で意識しすぎることなく、その人を介さずとも誰かと誰かがつながる状態を見られるのは幸せなことだと思います。

参加者2 マンションの一室で本屋をやっています。僕がいなくても、何をやっていてもいいから誰かがいてくれる、というふうに変えていきたいなと思っているんですが、いまはまだ「お店」という体を成しているんです。ただの場に集まって来て、あわよくば本を買ってくれるぐらいになるといいなと思っています。いっそ住んでしまっ、自分が寝るまでやっているとか、起きたら店が開くとか、そのぐらいのほうがいいのか。今は営業時間つくって、やっぱり店としての体を大事にしちゃってるんですね。

アサダ 市川ヨウヘイ君という友人がやっている、メガネヤという古本屋さんがいるんですが、ウェブには「南森町のマンションの一室で10年以上古本屋さんを営業している。古本屋を開放してホームパーティーやトークイベントやスナックイベントなどを開催」と書いてあります。「南森町のマンションの一室」というのは元208南森町です。当時、208の常連だった市川君は、自分の家で古本屋をやっていたんですが、自宅が手狭になったのと、208を気に入ったのもあって、そこを借りて古本屋さんをはじめたんです。元208の空気を彼も知っていてやっているからかもしれませんが、古本屋さんが場を開いているんなことをやっているというよりは、家的な空間で古本もあってなんでもやっている曖昧な領域になっています。この場で金銭のやりとりがあって本が売れているかという、たぶん微妙だと思いますが、彼は本よりもっと他の何かを動かしてる気がしますね。

参加者2 先日、ある集まりの人たちが車座トークをやっていたんですが、どんどん話が逸れて、あるお母さんが学校の校則がおかしいという話をしはじめて。その時、そういう話を誰かに聞いてもらいたい人はたくさんいるけれど、職場などではあまり話しているわけではない、ということに気づいたんです。それをうまく店の本を使ってやっていけば、広がりがあかなと思ってるんですが。

アサダ そうですね。というのも、この市川君が普段やっていることは、ほぼ人生相談なんです。みんな悩みを解決しようと思って行くわけではなくて、ふらっと行って本を読んだり話をしていると、失恋とか子育ての話がぼろっと出てきて、彼はそういう話を受け止め続けている。いや、ただ受け止めているというよりは、いい意味でズラしたり、他の関心につないだりもしているかと。さっきの団地で音楽を介して話すのと一緒に、僕らが「なんちゃら訪問です」という感じで行ったら、話す内容はたぶん違ったと思うんです。音楽でもなんでもいけれど、入口がたくさんあって、ちょっとつくと、なかなか出てこなかった話がたくさん出てくる。それを出口のほうから見ると、完全に悩み相談のように見えるけれど、「悩み相談に乗ります」と入口から言ってしまうと、人は来ない。

参加者2 それをゆるくやるのは、けっこう難しいなと思っています。世の中の人には本屋に行っても店員と話はないと思うんですが、自分はその真逆をやっているの面白がって来てくれる人はいると思う。自分も話を聞くのは楽しいし、いいアドバイスしなくてもいいやと思って聞くんですが、聞き流すのは難しくて、わりと正面から受け止めちゃうんですね。

アサダ 自分ひとりで受け止めたって、結局受け止めきれないし責任持てないので、何人かでバトンタッチしていったほうがいいんじゃないでしょうか。

ササキ 住み開きをしていた時の生活が表現になるという感性と、子育てはどう連続していますか。自分の血縁家族ができた時に、その感覚は変わったのかつながっているのか。

アサダ 大阪から滋賀に引越してから上の子が生まれました。子育てしながら住み開きしていると子ども連れにも来てもらえるし、今後こんな感じでやっていくなかなと思ってたんですが、一方で僕は仕事で東京にすることが多くて、滋賀と東京が半々くらいになっていくと父親不在の状態になるじゃないですか。まずいなと思って、2人目が生まれるタイミングで東京に家族で引っ越しました。そこから生活を整えるのが大変で、ネガティブに言うと家を開く余裕がなくなりました。あえてポジティブに言うと、仕事で場づくりをやたらめったらやっているので、家でまでやるモチベーションが下がったんです。そんななか、子どもの保育園問題や僕の仕事の今後のこともあって、しばらくは妻と子どもたちは新潟で実家と同居、僕は東京に住みながら新潟に通うことになりました。

というわけでもう住み開きはやっていないんですが、こういう家族の変遷自体を書こうと思って、この2年間、ウェブ平凡で『ホカツと家

族』という連載をしています。リアルタイムで全16回書き終えて、12月に本になります。家族公認で赤裸々に書いているんですが、同時に、僕が「この家族いいかも」と思った方に取材をしに行くと、合間に違う家族の話が入るという構成になっています。どうやって家族を開いていったかとか、どう家族の変化を受け入れるかといったことを、悩みながら実践している人たちと一緒に言葉にしていこうと思って。それはそれで住み開きという形で場を開いていた時とは違うつながりができました。この原稿を読んでくれて、うちの家族にも思い当たることがあるというような人と。

「住み開き」の本でも31事例取り上げましたが、7年くらい経っているで半分ぐらいやめてるんですよ。そのほとんどが家族や生活環境の変化によって、やめたり移転したり、店や仕事など違うかたちになったりしています。生活と直結している表現ゆえに、もろに生活の影響を受ける。もうすぐ出る文庫本では、やめた人がやっていた当時をどう思っているのかも取材しました。面白かったのは、やったことでこういう縁ができてよかったと言っている人の現在を見ると、住み開きを経て違うステージに上がっているという意味で、住み開きはスタートアップ的な生活実験の場だったんだろうなと思います。

久保田 アサダさんはヘルパーをやっていた時期もありますよね。たけし文化センター連尺町では、障害の人の生活を支えることの中に、住み開きの遊びは入り込めるのかということを実験しているんですが、そういったことで何か感じていたことはありますか。

アサダ 僕がヘルパーをやるきっかけになったのは、榎邦彦さんという尊敬するヘルパーの存在です。榎さんは大阪東成区でココペリというNPOを運営されていて、脳性麻痺の方や車椅子の方の支援をやっていらっしゃいました。一方で、演劇とか音楽もやっていた。2005年に、ココペリのメンバーさんとコロシアムで、障害のある方と演劇作品をつくる「ほうき星プロジェクト」をやりました。その時、僕は演出用の映像を撮るために、メンバーさんの生活に入ってしまったんです。ヘルパーについていくわけですが、メンバーさん本人とも仲良くなって一緒に寝泊まりしながら撮っていたときに、ヘルパーの仕事は面白いんだなと感じました。それまでは、ミュージシャンとしての榎さんの姿を見ていたけど、彼がヘルパーをやっている姿も全くブレていなかった。この人は、音楽もヘルパーも面白いと思ってやっているんだ、アート活動と生活が地続きなんだ、ということがわかったんです。それで、自分が障害のある方と何かすることに関心を持った時に、支援の現場にも一度入ってみたいと思って、ヘルパーの勉強をしたり現場に入ったりしていた時期があったんです。

その時に、榎さんがやっていた実践が、実は住み開きのようなことでした。「オシテルヤ」という場所があるんですが、榎さんを合

め、ココペリで働いているヘルパー3人のシェアハウスでした。そこをバリアフリーにしてメンバーさんのたまり場にしたいんです。なぜかという、ガイドヘルパーをしていると、映画館に行くとか演劇に行くとかで、何かとお金を使う。でも、面白いことは自分たちでつくれるから、その場所を持ってばいいんじゃないかと考えたんです。そこにしょっちゅうメンバーさんが来て何かやっている。だから、榎さんたちからしたら24時間ヘルパーをやっているようなものですが、あくまで家の生活を開いて集まるようにした。なので、この時間は彼にとっては仕事じゃないんですよ、ある意味。そういうことまでしてやろうとしている姿勢が面白いなと思いました。ヘルパーさんの日常生活を開いていくことによって、実は支援の時間以外でも、メンバーさんの可能性が広がることに気づいて、とても影響を受けました。

ヘルパーさん自身がいろんな人の出合いを大事にしていたので、僕が随行できた。普通はなかなかそんなことさせてもらえません。ヘルパーさんとしては仕事に付き合われたら困るし、メンバーさんも困るからって。意外とメンバーさんは「俺はいいよ、誰が来てくれても」と言ったとしても、ヘルパーさんがシャットダウンする可能性があるわけです。ヘルパーさん自身の開き方に余白があるということが大事だと思います。

GUEST PROFILE

アサダワタル 文化活動家

1979年大阪生まれ、東京都⇒新潟県在住。文化活動家／アーティスト、文筆家、社会福祉法人愛成会品川地域連携推進室コミュニティアートディレクター。音楽をはじめとした「表現」を軸に、福祉施設や復興住宅、小学校や住居や街中で、属性に埋もれない「一人ひとりの個性」に着目したコミュニティづくりを行う。2019年から、品川区立障害児者総合支援施設のコミュニティアートディレクター（社会福祉法人愛成会所属）として、障害のある人と地域をつなぐアクションを行うほか、「千住タウンレーベル」（東京都足立区、2016年～）、「ラジオ下神白」（福島県いわき市、2016年～）など、全国各地でアートプロジェクトを展開。著書に『住み開き 家から始めるコミュニティ』（筑摩書房）、『コミュニティ難民のススメ 表現と仕事のハザマにあること』（木楽舎）、『想起の音楽 表現・記憶・コミュニティ』（水曜社）、『表現のたね』（モ・クシュラ）、『アール・ブリュット アート 日本』（編著、平凡社）など多数。東京大学大学院人文社会系研究科、京都精華大学全学プログラム非常勤講師、大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員、博士（学術）。また、グループワークとしてドラマを担当するサウンドプロジェクト「SjQ/SjQ++」では、アルス・エレクトロニカ2013デジタル音楽部門準グランプリ受賞。



多世代型介護付きシェアハウス はっぴーの家ろっけんに行ってきた

文:ササキユイチ

多世代型介護付きシェアハウス・はっぴーの家ろっけん(以下ろっけん)は神戸市長田区の六間道商店街の一角にある緑色の6階建ての建物だ。看板はない。サービス付き高齢者向け住宅^[1]、訪問介護、訪問看護の仕組みを使って高齢の方に住まいとケアを提供しながら、1階のスペースは地域にも開かれた共用のリビングになっていて、週に200人が訪れるという。コンセプトは「遠くのシンセキより近くのタニン」。2019年の暮れ、私たちは「集まって住むこと」のヒントを探りに、この場所を訪れた。

その日、ろっけんのリビングではトーゴ共和国出身のダンサーが主催するイベントが開催されていた。到着すると既にたくさんの方が集う。「今ここにいるの、半分以上僕も知らん人です」と、代表の首藤さん。鮮やかな衣装の演者たちがアフリカドラムを鳴らすと、腹痛を訴え気遣われていた女性の唸り声ははっとやむ。手拍子と歓声。傍らで新聞を折り続ける人。キレキレのダンス。茶がこぼれる。「点滴ですよ」とビール瓶が渡っていき、女の子がテーブルの上を跳ぶ。赤ら顔で飲み語らうおじいちゃんと子連れのお母さん。「家に帰る!」と飛び出た男性を追いかけるスタッフと居合わせた客人。終演後のリビング、「M-1グランプリ」を見る若者とおばあちゃん。家族ではない、側にいる他人同士。夜も更ける頃、居心地の良い雑多さに私もすっかり魅了されていた。

後日、私たちはろっけんを運営する株式会社Happy代表の首藤義敬さんと、ケアマネジャーの岩本茂さんに話を聞いた。

1. 国土交通省・厚生労働省が所管する「高齢者の居住の安定確保に関する法律」に基づく高齢者のための住宅。バリアフリー対応の建物で独立した住居で暮らしながら、安否確認や生活相談のサービスを受けられる。

暮らしをつくる=孤独を埋める作業 日常の登場人物を増やす

— 障害のある人の場合、家族との同居か入所施設やグループホームなどの施設での暮らしと、住まいの選択肢がとて少ない現状があります。一方で、ヘルパーを利用した一人暮らしの実践が少しずつ増えている。ただ、はたして今「一人で住むこと」が幸せなのか?と、そこでレッツは多様な人がごちゃごちゃいるシェアハウスでの生活を実験しようと思ったんです。

首藤 一人で暮らしてそれだけで幸せなのか?という問いが立ったと。高齢者もそうで、「在宅」といって住み慣れた自宅での生活をゴールと考える人がいる。でも、人間って、金があって不自由なく暮らしていても、世代や国籍、障害のあるなしに関わらず、孤独に苦しんでいると思うんです。僕らが言う「暮らしをつくる」というのは「孤独を埋める作業」のこと。バリアフリーや介護みたいなインフラ面って人生の2割くらい。その他の8割の部分、好きなことや趣味は一人では出来ないことが多い。関わる人を増やしておけば、選択肢が増えたり実現可

能性が上がる。だから、暮らしをつくる上で日常の登場人物を増やすことは大事にしています。

コミュニティが重要とよく言われるけど、コミュニティはつくろうとすると大失敗するもの。価値があれば勝手にそこに人は集まってくる。障害のある人もない人も集まって暮らすシェアハウスは面白いけど、主語を「障害者」にしない方がいいと思うんです。僕らの場合は、そこに関わってほしい人にとっての嬉しいことや、自分らが生きていて欲しているものを深掘りして場に当てはめていく。おじいちゃんおばあちゃんがいるということは、そこに「添える」ような感覚で、いつも暮らしをつくっています。

— 伺った時も、入居する高齢の方のために何かをやるというより、むしろ彼ら彼女らに付き合ってもらっているという感じだなと。

首藤 そこは大事にしているところで、おじいちゃんおばあちゃんのためにやらないと決めています。対個人じゃなく、環境をつくる。そして皆で何かすることを良しとしていないんで

す。僕にとって美しい日常は、相互にどうでもいいなと思える環境。ろっけんにはいろんな人がいるけど、良い意味で全員お互いに興味がない。そういう距離感がつかれないと「日常」にはならない。イベントもやるけど、「興味があったら参加して」ぐらいで考えている。ただし、イベントごとでいろんな関係の人が集まって、個人的に仲良くなって個々にニーズが生まれたら、それをまた日常の中にはめていくということをしています。

— 先日、岩本さんから聞かせてもらった介護のアイデアがとて興味深いと思いました。改めて説明してもらえますか?

岩本 住まいへの訪問サービスと活動する通所先とで、その人に関わる支援スタッフが変わってしまうところを、同じ人が関わって、なおかつその人がケアプランも考えるというアイデアですね。生活の基本的なケアを慣れ親しんだ同じ人が行って、プランの変更も小回りがきくことで、本人のしたいことを一緒に実行する「パートナー」になるような仕組みです。ただし、もちろん完全に一人ではできないので、補助的な人も必要ですし、専門職以外の登場人物は絶対に増やしたいところです。

首藤 必要なのは選択肢を増やすこと。豊かな人生って、良いことだけじゃなくて、ようわからんことも含めていろんな体験をすること。本人が求めていることを差し出すというのは、僕はニーズの満たし方としてはレベルが低いと思っているんです。本人が気付いていなかったことを体験して「いいじゃん」と思ってもらった瞬間がめっちゃ楽しい。

暮らしと生き方 価値観をまちにひろげる

— 首藤さんのお子さんの振る舞いや存在によって、空間がかき回されて楽しくなっている、場所の敷居を下げている、それが肝だなと感じました。テーブルを跳び渡ったり(笑)。首藤さんたちご家族にとっても必要な場所なんですね。

首藤 娘は場においてブレイクスルーをする人で、彼女を容認することで救われる人がいる。他にもいろんな無茶苦茶な人がいるけど、ようわからんくなるというか、一個一個が別に気にならなくなる。

はっぴーの家は、福祉事業がやりたかったわけじゃなくて、そもそも家族や自分のためにやっているんです。僕自身、同じことをずっとさせられるのが嫌で、友達は多かったけど学校には行ってなかった。自分の子どもも同じ特性があるから、彼

らが学校に行かなくても成り立つ場所を考えたら今のかたちになった。夫婦とも変わり者で、祖父母が認知症になって、子育てと介護でダブルケアの状態。こういう時、人は子育て・仕事・介護などのどれかを諦めないといけなくなるけど、何一つ妥協せずにやろうとしたら、僕らにとってはこういう場をつくる他に選択肢がなかった。そうして器を広げたから、共感して集まってくる人がいたと思っています。

— 一緒に働くスタッフとしては、そういった場の成り立ちはどう受けとめていますか?

岩本 単純に一緒にいて楽しくて、働いている云々という感覚がその次に来る。あとは僕自身のライフスタイルや家族のことをより考えるようになって、そこから新しくやりたいことが出てくるということもありますね。最近、明石市で自分の家族が子育てをしながら働いて、子どもも障害のある人や認知症のおじいちゃんおばあちゃんと遊びながら育ていけるように、生活介護とデイサービスの仕組みを使っているいろんな人が集まれる「タチバナさんち」という場所を始めたところです。

首藤 ここにいると入居者もお客さんもスタッフも誰も特別扱いされないんです。それはそれで落ち着くというか、細かいことを気にしなくてもよくなって肩の荷が降りる。そうすると人間は、ごまかしが効かなくなってその人そのものが出てくる。好きなことやっていいんだと思える。暮らしを求めてこの家に来る人に対して、「サービス提供者」の視点でいても噛み合わないんですよ。暮らしの視点に立って、ここで働く時間を自分の生き方のひとつにしなないといけないとなった時に、仕事以外の自分が出てくる。ここの雑多さはそれが出やすい環境なんだと思います。

— 株式会社Happyは不動産事業も展開されていると聞きました。どういことをされているのでしょうか?

首藤 これも不動産業がしたいわけではなくて、ライフスタイルをつくりたくてやっています。物件だけでなく、コミュニティや仕事、その人が好む生き方といったソフト面も提案していく。若い人に向けても相談に乗っているし、高齢の方に向けては「はっぴーの家の離れ」をつくる感じ。部屋は街の中であって、リビングがろっけんでも他の場所でもいい。そうやってこの場所の価値観を、放射状に円形で広げるのではなく、スポンジの穴のように街の中にまだらに点在する形で広げているんです。(了)

テンギョウ・クラさんに聞いてみる!

生活とか自立とか友達とか

Ask Tengyo Kura about life, independence, friends etc....

たけし文化センター連尺町3階のシェアハウスで、壮さんの生活実験がはじまりました。

彼の同居人でありフィールドワーカーの佐藤航也さん、アーティストのタカハシ'タカカーン'セイジさんと、壮さんを愛してやまないヴァガボンド(放浪者)のテンギョウ・クラさんが、壮さんとのシェア生活を振り返りました。家族でも支援者でもない同居人や友達として居ることの価値と、そうした立場で生活を共にすることの難しさ、重度知的障害者を含むさまざまな人々たちによる開かれたシェア生活の展望について、意見を交わしました。

At the shared apartment on the third floor of Takeshi Cultural Center Renjaku-cho, Takeshi's life experiment has begun. There are three cohabitants: field worker Koya Sato, artist Takahashi 'Takakaan' Seiji, and Vagabond(the wanderer) Tengyo Kura who adores Takeshi. They looked back on their shared life and they exchanged opinions about the value of living as a friend who is neither a family member nor a supporter. They examined the difficulties of living together in such a position and considered the perspective of an openly shared life by various people including people with severe intellectual disabilities.

ゲスト テンギョウ・クラ (ヴァガボンド、教師、コミュニケーター、ストーリーテラー)
タカハシ 'タカカーン' セイジ (だんだん施設になるセンターをつくらうとしている人)
佐藤航也 (千葉大学大学院)

聞き手 高林洋臣、ササキユイイチ、久保田翠 (認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ)

Guest: Tengyo Kura (Vagabond, teacher, communicator, story-teller)
Seiji 'Takakaan' Takahashi (Someone who tries to create a venue which gradually turns into a welfare facility)
Koya Sato (Graduate student at Chiba University)
Interviewer: Hiromi Takabayashi, Yuichi Sasaki, Midori Kubota (Approved Specified Non Profit Organisation Creative Support Let's)

壮さんとのシェア生活のはじまり

ササキ このたけし文化センター連尺町の3階で、壮くんが10月7日から生活をはじめました。今日は、3階のゲストハウスに宿泊しているクラ・テンギョウさんと、シェアハウスの同居人の佐藤航也さん、タカハシ 'タカカーン' セイジさんと一緒に話をしていきたいと思います。

久保田 重度の知的障害者にとって、グループホームでも入所施設でもない住まい方というと、一人暮らしが理想のように言われるんですが、一人暮らしってそんなにいいものなのか、誰かと何かをシェアしながら住むほうが豊かに人生を送れるんじゃないかと考えると、これって障害者だけの問題ではないんですよね。なので、重度障害者の住まい方に限定せず、いろんな人の住まい方も参照しながら、どんな生き方、住まい方があるのかを探っていききたいというのがこのトークシリーズの趣旨です。今回は、世界を旅していろんな人のところに居候しているテンギョウさんに来ていただいたので、家族ではないつながりの中での振る舞い方や関係性について話してみたいと思っています。

テンギョウ 「ヴァガボンド」を自称していて、20年くらいずっと、定住せずいろいろなところに居候しながら、知らない文化のあるところに「カルチャーダイブ」することを楽しみながら生きています。

レッツを知ったのは3年前の東京都の文化事業がきっかけで、それ以来、ことあるごとに一緒にさせてもらっています。昨年11月にたけし文化センター連尺町ができたばかりの頃から今年2月までの3ヶ月間は、この3階に居候してまして、当時は壮はまだ住んでいなくて、ひとりで場をあたためている状態で、入口で道行く人に声をかけたり、興味を持ってくれる人がいたらこの場所を紹介したりしながら過ごしました。今回はアフリカから帰国したタイミングで、「スタ☆タン!!」というイベントの審

査員を務めることになっていたの、浜松に来てます。今回は壮と一緒に過ごす時間が少しあって、「壮、いよいよここに住みはじめたんだな」と感慨深く思っているところです。

タカハシ 障害福祉分野で創作支援の仕事しながら、個人的にも表現活動をしています。「無職・イン・レジデンス」という活動や、最近はレクリエーションセンターのようなことをやっていて、福祉施設を作りたいなど思っています。レッツには5年前ぐらいにふらっと来て、いまは大阪と浜松を往復しながら、ときどき3階で暮らしています。

来た当初は、ここはでは壮くんが殿様で、壮くんのために動くという雰囲気があると感じました。それは悪いことではないけれど、僕も新しい住人だということをどう考えるかという話をシェアメイト同士でしました。

航也 千葉大学大学院の博士後期課程で、スウェーデンの障害福祉について文化人類学的な研究をしています。友達からレッツのことを聞いて、4月にここに初めて来ました。

10月から壮さんが3階に住みはじめて、僕も同じ頃から暮らしはじめました。最初の2週間ぐらいは、イベントがあるとゲストと飲み会をしたり、レッツのスタッフさんとご飯食べたりしていましたが、何も無い日は僕と壮さんとヘルパーさんの3人で静かに過ごすことも多かったんです。僕と壮さんは付き合いが浅いので、壮さんってどういう人なんだろうと思って観察したり、ヘルパーさんとも初対面なので「よろしくお願いします」という感じで話したり。

テンギョウ 誰もいなかった頃の3階を覚えているので、いまは率直に誰かいる安心感があってね。俺は壮に語りかけるけれど、言葉で返されることはないから、コミュニケーションは観察がメインになる。彼もこっち



をチラッと見たり、やりたいことのサインを出したりする。そのリズムに無駄がないというか、俺にとって安心できるペースだという発見がありました。自分が寝起きする場所にそういう存在がいることがなぜ安心感につながるのかはわからないけれど。

久保田 今まで壮の管理は母親の私がやってたんです。ヘルパーさんはだいたい私に指示を仰ぐし、ノートに書いておくとやってくれる。だけど今回は、壮が自立して住むことがテーマなので、私は一切ノートのやりとりに関わっていないんです。洋服や布団や食材を用意したりはしていますが、あとはヘルパーさんたちの試行錯誤に任せています。私でもなく親代わりでもなく仲間として、ササキくんと高林くんが間に入って、最初はいろいろ調整してくれていました。だから、私にはなくてこのふたりに質問が来るようにしたというのが、大きな変化です。私は毎日ドキドキなんです。でも、いつまでも私がいるとヘルパーさんも壮も私に頼るだろうから、1ヶ月間彼に会わない、登場しないと決めて過ごしていたんです。そこに、航也くんが来たタカカーンが来たり。ヘルパーさん含めて、みんな初めて会った人たちという状況で、どうなるのかなと思ったけれど、意外に壮は慣れてきた。

いろんな人の

「おせっかい」に委ねてみる

久保田 ところで、壮は金髪なんですよ。だいぶ黒くなってきてますけど。これをやった張本人がテンギョウさんなんですよ。

テンギョウ 3~4年前、アーティスト仲間から「壮くんっていうすごい人がいる」とだけ聞いて、初めてレッツに遊びに来たんです。当時、入野にあった施設には「爆音部屋」というのがあって、窓に防音板をはめていて薄暗かった。その中で、壮が音に合わせて体を動かしていたのが、俺にとっての壮との出会いで、見た瞬間に「これシャーマンだよ、すごい神がってるな」と思ったわけ。想像を超える動きとか目つきに一気にファンになって。

何が言いたかったかというと、俺は壮にすごく思い入れがあったということ。彼は、社会の中で障害を持っていて、だから、みんなでケアすべきということになっている。障害を持っている人たちが、いや、障害の有無に関わらず全員が平等であるようなシステムをつくることを、俺たちは諦めちゃいけないと思っている。だけど、個人として一人一人と向き合った時に、equal rightsではあるけれども、equal valueではないんだという事実を受け入れることが、健全なコミュニケーションや関係性を築く上では大切だとも思っているわけ。他の人にも優しく接しなきゃいけないけど、な

ぜかこいつにはこんなにも惹かれてしまうとか、こういう障害を持っている人とは一緒にいられるけれど、こういう障害を持っている人は苦手だなということも言っていていいと思うし、そのうえでみんなで一緒にいるためにどういうシステムをつくっていくか、知恵を絞るのが大事だと思うんです。

でもいまは、平等なシステムばかりが目立っている気がします。「システムがこうなっているんだから、あなたもそう振る舞いなさい」という流れが強くて息苦しい。「みんな」にとってではなく「それぞれ」にとって居心地のいい場所、生きやすい社会ってなんだろうと考えるとき、障害を持っている人たちはヒントをくれると思う。なぜなら、みんな違うから。でも、意識の調整を言語優先でできちゃうと、「ルールはこれでいいよね、みんなこれでいよ」というふうになりがちで、みんな同一の存在なんだと勘違いしかねない。

壮が東京に遊びに来たとき、「かしたしだけし」という企画で、彼を上野で1日引き受けたんですね。今思い返すと俺にはハードルが高すぎた。まず、壮が東京に着いたとき、俺は嬉しさのあまり両手を広げて「たけしー!」ってやったんだけど、壮は全然俺のこと見てくれなかった。アメ横には壮の大好きなお菓子がたくさんあって、壮があまりにもいろんなものをグシャッとやるもんだから、一緒に来ていたスタッフの山森さんと、壮の両脇を抱えていたら、俺たちが壮を暴行していると通報されて、十数人の警察官が壮と俺らを引き離して職質するというシュールなことになったんです。そういうことがあって、俺はくたびれきっていた。

次の日も一緒に上野公園を散歩したんだけど、壮も疲れ切って不機嫌になっていて、だだこねてスタバの真横で寝転んじやったときに、俺の口から出てきた言葉は「みんなの迷惑になるからやめろよ、壮」だったわけ。俺、それを言った瞬間に目の前が真っ暗になって。壮のこと大好きとか言っときながら、いざ、彼が自分の言うことを聞いてくれないときに出てきた言葉が「みんなの迷惑になる」だった。俺はみんなの代弁者でもないのに。そのことが耐えきれなくて。そして最終的に、自称・壮の友達でしかないということに気づいたんです。

俺は壮からの愛情を感じたかった。でもそれを感じたことは一度もないわけ。じゃあ、相手の気持ちがわからないまま、友情は成り立つのかということになるよね。永遠の片思い。それって辛いわけ。エゴだけど報われたいという思いがある。これは自分のコンプレックスなだけけれど、俺は「おー!たけしー!」って肩組んだりとか、ガツガツいっちゃうのね。壮はそういうの嫌かもしれないけれど、やってしまう。そんな自分が嫌だなど思いながらも、壮との関わり方がずっとわからなくて、一方的にやってきた。

で、金髪。あるスタッフさんと、「壮は金髪にしたら絶対カッコいいよね」という話をして、そのときは翠さんも「いいですよ」という感じだったので、深く考えずに寝ている間にブリーチかけて。実際に金髪になった翌



日、翠さんのFacebookに「とっても悲しかった」と書いてあったのね。

久保田 金髪にするという発想が私には全くないんですよ。息子が金髪になっているの見て、不良少年と一緒にいるような気持ちになって、「悲しい、壮じゃない」と私は思ったんですが、あれは大きな出来事でしたね。

テンギョウ 俺にとっても大きな出来事でした。永遠の片思いをぶち破るには、もうおせっかいしかないというのが俺の結論。

優しさって感情的なイメージがあるけれど、俺は知性だと思うわけ。例えば、道端で雨に濡れて震えてる子犬を見たら、「かわいそう、助けてあげたい」と思う。でも、やさぐれた酔っ払いのおじさんが雨に濡れていたら、見て見ぬ振りするでしょう。子犬を助けたいのが人情だと思うけれど、優しさとは言わないと思う。優しさというのは、酔っ払いのおじさんにも同じように関心が向くことだと思う。自分には不快だけど、でも、この人にはこのアクションが必要かもしれないと思って、あえて踏み込んでみる。だから差別がないはずなんです、本当の優しさって。そして、それがどこから来るかという知性だと思う。知性は想像力を駆使しなくちゃいけない。でも、結果としての現れ方はおせっかいでしかないんだよね。

社を金髪にしたときの俺の思いが優しさだったかはともかくも、絶対カッコいいという確信だけはあったので、あえて踏み込んでみた。それに、その話をしたスタッフさんと俺は間違いないく社を好きだって確信できたので、俺らがやるなら、結果がどうであろうとある意味正直だと思ったのが金髪の顛末です。

久保田 そのあと、社はいろんな人に声かけてもらえるようになって、テンションが上がったんですよ。私はこの姿を彼には与えられないと思ったんですよ。だから、私が決めてもこの子の人生は楽しくならないと思いましたね。人様に委ねるとこんないろんな経験ができるんだということも。嫌な経験もあるかもしれないけど、障害があろうがなかろうが、それが普通の人生だろうかと、本当に感じられたのね。あの金髪事件は、この3階での実験にもつながっていると思います。

高林 そういう久保田さんの経験から、いろんな人に関わってもらって、壮くんの人生を考えていくのがいいんじゃないかということで、3階にシェアハウスとゲストハウスをつかった。たまたまそのタイミングで、航也さんやタカカーンさんが来て、今の生活が送られているというわけですね。

シェアメイト同士が見た

それぞれの「居かた」

航也 テンギョウさんの壮さんへの愛がすごいと思う。僕は10月にほぼ関係性のないところから一緒に暮らしはじめて2、3週間経ちますが、僕は壮さんのことをまだよく知らないし、壮さんに僕はどう思われているのかもまだわからない。

久保田 障害のある人だから優しくしなきゃ、わかってあげなきゃというわけではなくて、この人は好きだけど、この人は苦手ということも絶対あるし、そこもフラットでいいと思います。たまたま航也くんはここに来ちゃったけど、「なんだこいつ」という関係でもいいんじゃないかな。

タカハシ 僕は偶然の縁のようなものが重なり、障害のある人が中心となって出演する音楽祭の事務局スタッフを務めたり、作業所の創作支援スタッフとして障害福祉に関わるようになったんですよ。その作業所での初日、利用者さんが僕を名前で呼んでくれるわけです。その前に勤めていたブラック企業ではそんなことなかった。一人前になるまで認めないぞという雰囲気だったので。でも、作業所では、何の技術もない僕を受け止めてもらえた。彼らには対等さというか、受け入れ上手なところがあるなとよく思います。

共に過ごすことについては僕も考え続けてきたんですが、僕はテンギョウさんみたいにはできない。熱い気持ちをぶつけられないというか、熱い気持ちすらないのかもしれない。お互いわからないまま一緒に過ごせる、放っておいてくれるというのが、僕は好きだから、無理に壮くんのことわかってほしいし、僕に興味がなくてもいいんです。他の人が積極的に関わろうとしているなら、役割分担じゃないけれど、僕はこういう感じでいいかなと思っています。まだ10日くらいしか住んでいないですが、3階の暮らしはうまくいっている感じがしています。

テンギョウ ヘルパーさんたちも、ユニークな体験をしたり変わった人生観を持っていたりするよね。とても眼差しが面白くて、助けを必要としている人に対しても独自の人生観が出る。それを見て「ここまで踏み込むか」「ここまで責任負うんだ」という驚きがありました。俺にとって責任や人の期待は敵のようなもので、嫌になったらいなくなるというスタンスを貫いてきたので。そういう意味で、まず身体から入って最終的には気持ちもコミットするヘルパーさんのスタイルは、なかなかドラマチックだと思う。

ヘルパーさんと深夜まで話し込んだことがあって、学ぶことが多かった。人との出会いって、障害の有無とは関係ない気がするんだよね。最終的にはわかりあえなさを引き受けて、絶対的な孤独と向き合うしかない。もちろん、愛情や感性を授けてくれる家族も大事だけれど、それですらみんな他人だしね。

高林 ヘルパーさんの難しさって、仕事だから責任が伴うことなんですよ。壮くんの人生だから彼の責任のはずなのに、ヘルパーさんや親の責任のほうが大きくなりがちじゃないですか。そこに無責任な人が一緒にいるのはなかなか難しい。同居人が無責任に提案して、ヘルパーさんにやらせるような構造にもなりかねない。

タカハシ 僕は3階で過ごすときは常にプライベートですが、ヘルパーさんは仕事で来る。その温度差を感じることはあります。壮くんが殿様化するの、7時に起こさなきゃとか9時までに下に送り届けなきゃという使命感、責任がそうさせるような気がするんです。一方で、僕は夜型だから朝ゆっくり寝ていたい。でも僕の気持ちを汲み取ることはヘルパーさんの仕事じゃないから、どうしたものかなと。かといって、トラブルが起こるわけでもないし、ルールを設定するのも嫌だし、自分の中での押し問答はあります。

航也 例えば、僕の目の前で、ヘルパーさんが壮くんに水を飲んでもらおうとして、こぼしちゃったときに、一緒に雑巾で拭くというの、ちょっとした責任の負い方かなと思います。そういうことがいろんな場面で起きるという意味では、少しずつ責任を引き受けているんじゃないかな。

テンギョウ 人間と一緒に行動する理由として、親子の情緒的な繋がりとか、みんなで畑を耕して冬に備えるというような目的の共有があると思うけれど、俺らのこの居候スタイルはそこに異物として入るわけだよ。俺らは情緒的な繋がりもないし、目的も共有していないから。そのときに、場を共有するってなんなんだと考えると、作業なんですよ。まずは生きるための作業。食べる、寝る、排泄する。その次に気を済ます作業。今日はお腹が空いているのでご飯を多めに作ってみるとか、疲れているから余分に寝るとか。最終的にはオプション的な作業。暇だから映画を見に行くとか。

生きるための作業に対しては、お互いにまあ当然だろうという感じで寛容だと思うんです。でも、気を済ます作業になったときに、時々ぶつかる。ちょっと気を済ませたいのでいつもより余計にやってみるといときに、「それやるの?」というふうに、急に相手の気に障っちゃったり自分が気にしちゃったりする。そういう状況でいかに知恵を使い合えるかが大事だと思う。

タカハシ こないだのイベントの時に、3階が出演者控え室になったんですよ。それで、スタッフさんと、僕もちょっと加わって朝から掃除したんです。そしたら、テンギョウさんが「朝から掃除機の音を聞くのがいちばん嫌なんだ、この全体主義が」と言っていましたね。僕もイベントを手伝うことになっていたから、そのときは掃除したんですけど、常に手を動かしてないといけないような空気が嫌だと思って、イヤホンで音楽聞いてて、お腹すいたなと思ってラーメンつくってたら、テンギョウさんに褒められた。

テンギョウ 3階のドアがドーンと開いて、スタッフが掃除機を抱えて入って来るもんだから、俺らのテンションが全く追いついていけなかったんだよ。それで「俺ダメなんだよ、こういうの」って言って、ふと見たら、タカカーンはキッチンでネギ切ってたわけ。「お腹すいたんでラーメンでもつくろうかなと思って」って。俺びっくりしたのね。いい風景だったんだよ。ちゃんと気を済ますポイントを知っているのが救いだった。自分の気を済ますより我慢して周りが滞りなく動くようになって、個人の思いが全体の利益のために搾取されてしまう雰囲気を感じることもあるので。特に日本は人に迷惑かけちゃいけないと思っているし。そうなるといつも自分の気を済ませられない状態が積み重なってしまうんだけど、タカカーンは絶妙にずらしていった。俺、20年近くずっと居候やってるけど、今回すごい学んだなど。

タカハシ 毎回こういう施設に来ると、スタッフさんは支援しつつイベントもやりつつ議論もしつつ週5〜6日働いて、超人だなと思うんですけど、一方で僕はスタッフじゃないし、ここで過ごしてほしいというオーダーしかもらってないから。障害のある人だけじゃなくて健常者と言われてる人たちの中にも、こういう人がいてもいいよねというバリエーションがあっていいと思う。僕はけっこう抑圧的に10〜20代を送ってきたので、それをどう解放するかという再実験をここでもやっているなと思います。

久保田 重度の知的障害の人は支援する・されるという関係か、母親と息子のように決まった役割の中でずっと生活しなきゃいけないのがち

です。それはお互いにしんどいだろうから、その関係性を壊してくれる他者が必要だと思って、ゲストハウスをはじめたんですが、関係性は変わったと思いますか?それから、ゲストという役割についてはどう感じていますか?

タカハシ 壮くんとの間わりはヘルパーさん次第で全然違うんですけど、僕だったらそうはしないなということもあるわけじゃないですか。それを見て自分がくつきりしてくる感じがしますね。

ヘルパーさんにとっては、シェアハウスにヘルパーとして来るなんて、違和感があるんだろうな、やりづらいらんだろうなとは思いますが。今後シェアハウスとして稼働していくときに、ヘルパーさんが過ごしやすくなるのかなと思う。

僕らは3月末までいますが、将来この場所がいろんな方向に展開できるように余白を残す工事ができたらいいなと思っています。

航也 最初、僕の立場は曖昧で、障害について研究する大学院生でもあり、レッツでも少し働いているけれど、3階では自分の生活を送っている。でも、暮らしはじめると壮さんの生活に飲み込まれて、そればかり考えていたんです。その後、タカカーンさんが来て、テンギョウさんが来たことで、会話がが増えて広がっていきました。壮さんが寝た後、自分たちの話をしたり、こないだは刺身を買って来てヘルパーさんも含め3人でつまんだのが楽しくて、はじめてシェアハウスっぽさを感じました。

久保田 障害のある人がもう一人いたり、違うヘルパーさんも出入りしだすと、全然違う関係性が見えてくるし、ヘルパーさん同時が結託して何かは始めるかもしれない。そういうのは見てみたいですね。

重度知的障害者の新しい暮らしの展望

久保田 重度訪問介護を利用している知的障害者は、浜松では壮が3番目なんです。それだけ全然使われていない制度なんです。なぜなら、費用が膨大なので、行政としては利用者があまり増えても困るんですね。それはよくわかるけど、障害者の新しい住まい方が見えてきたら、お金をかけてよかったという話にもなるんじゃないかなと思っていて。

壮とヘルパーさんがここにいるということは、ある意味、安定感を生むものになっているのかもしれない。彼らはどこにもいかないんですね。それは、もしかすると、いろんな人がやって来る動機付けになるのかもしれないし、その人たちが好き勝手に何かはじめたら、楽しい場になるかもしれない。総じて言えば、障害の人たちがいるからこそできる生活の様式が、生まれたいいなと思います。

テンギョウ 障害があっても、周りの人との関係性でその障害が立ち上がらないこともあると思うのね。つまり、その障害特性が気にならない人の場合、障害者だという意識もなく関わると思うのね。それって、他の人から見たら気づきですよ。障害特性を問題だと認識している人にとって、よそから来た人が苦もなく楽しんでいる状況には、それまで固定されていた関係性がニュートラルになる希望があって、アートと似ていると思うわけ。そういう意味では、いま、航也くんとタカカーンがまればとのようにいて、なんの遠

慮もなく社と暮らしているという風景がアートのようなとも思う。それは、今まで社と関わってきた人にとっても、彼と出会い直せるチャンスだと思う。

タカハシ 社さんを同居人として見れるというのは望ましいし、ここでの暮らしは重度訪問介護という制度を使っているから、ほかでもコピー可能だと言えるのはいいことだと思う。僕からしたら、なんで今までなかったんだろうと思う。障害のある人の選択肢として、家かグループホームがしかなかったということに初めて気付かされた。

ササキ さきほどテンギョウさんが、家族であってもそれぞれ他人だという根源的な話をされましたが、家族というのは、一方で、他人であることを忘れさせてしまうような呪縛でもあるわけですよね。ともすると、支援者と利用者も、役割や目的を強制するような新しい呪縛になりかねない。そういうときに、お互いの役割がわからなくなるような瞬間をどう生みだしていけるのか。かつ、それが障害者の生活を支えるコストの削減になるというとは別の価値を示していけないといけないと思っています。

テンギョウさんは、居候というかたちで情緒や目的の共有とは違う新しい生活の仕方を編み出そうとしてきたのかなと思うんですが、これからのカルチャーダイブはどうなっていくと思いますか。

テンギョウ 新しい価値を創造したいということではなくて、自分がひとつのところにいると自分にワクワクできなくなってしまうので、喜びと楽しみだけをモチベーションに常に転々としているんだけど、ヴァガボンドというのはいつも不安定な状態なので、サステナビリティがあるのか、この先どうやって生きていくのかという問題がある。いわゆる自立って何だということでもあるんだけど。

前に脳性まひのある小児科医の熊谷晋一郎さんが、自立というのは依存先を増やすことなんだと言っていてね。俺は、自立というのは守られるべき権利であって、自分で自分の気を済ますことを許されている状態だと思っているんです。俺はいつも誰かのところに居候させてもらっている立場で、メインストリームの文化があるなかに飛び込むわけだから、文化的弱者なんだよね。文化の衝突が起きたときに変えざるを得ないのは俺のほうであって、それは苦痛や不快感を伴うんだけど、あえて自分に課しているところがある。

場に慣れると緊張感が抜けて自分の心地良い方についてしまいがちだから、違う文化に飛び込むことで、摩擦熱で自分の殻を燃やしてしまって、弱い部分をさらけ出したうえで、自分はどうしたいのか問いかけるのがカルチャーダイブだと思っています。

久保田 私、自立とは依存先を増やすことだと熊谷先生がおっしゃったとき、確かにそうだったんだけど、自分で依存先を増やすことができる人が前提なんじゃないかと、モヤモヤしたんですよね。熊谷先生って頭脳明晰だし言葉を持ってるし人格も素晴らしい方だから、周りにいろんなことを説明できるし、ファンもできる。一方で、私たちの依存先を増やすってどういうことなんだろうと考えたら、彼らは何もしないんですよね。でも、何にもしなくても、彼らにはやっぱり力があって、風通しのいい場をつくっておくと、彼らの魅力に誘われていろんな人がやってくると思えたんですよ。アルス・ノヴァはまさにそういう施設だけど、今回は住まいという本丸でもできるんじゃないかと思ったんです。

航也 ここで暮らす楽しさは、今みたいにイベントで話す場があったり、誰かが来ているんな話を聞けることでもある。生活の場といったときに、キッチンと部屋だけをイメージしなくてもいいんだと思います。

ササキ たけし文化センター連尺町ができて、壮くんと街中に出るようになると、「壮くん、久しぶり」と声をかけてくれる人がいるんですよね。それは、レッツの活動の成果だと思うと同時に、彼だけではない誰かがそういう環境をつくっていくにはどうしたらいいかと考える。例えば、別の人が自立生活をしようと思ったときに、ことごと同じように、文化センターの上にはシェアハウスをつくらなきゃいけないということではないですよね。

久保田 この場所は「たけし文化センター」なんて名前だし、こんなトークを年中やってるし、世の中からちょっと逸脱した場所なんですよね。たぶんそれは、こういう場所が好きだったり議論したり考えたりするのが好きな人が集まっているから。だけど、世の中にはもっとわかりやすい場もあっていいと思う。多様につくれるんじゃないかと思っています。重度訪問介護という制度がよいのかわからないですが、いろんな可能性をこの制度は含んでいるのではと最近感じています。でも、グループホームでもこういうことはできるかもしれないんですよね。

参加者 僕はフォーマルな制度に則ってやっている普通の社会福祉法人で、ある意味レッツに批判される立場であるわけで、コンチクショウと思うわけですよ。僕らの中にも、インフォーマルな部分や柔軟性はあるんだけど、フォーマルな施設って職員がブレないようにこの人にはこういう支援って適切な支援が決まっているんですが、僕らは本来、毎日、重い障害のある人たちに揺さぶられたり価値観をひっくり返されたりしているんですよね。だから、いつも「レッツが新しいことやってるんじゃない、僕らにも価値はあるんだ、第三者の力を借りなくても利用者さん自身が価値観を揺さぶってくれるんだ」と思うけど、こういう面白い3人が住んで新しい風を起こしてるのを見ると、打ちのめされた感がある。フォーマルな施設にいと揺れが許されない。秩序と無秩序の狭間にいられるのはすごいことで、タカハシさんのラーメンの話なんて、僕ら福祉法人でやったら大問題になるよね。揺れていられることの根底には文化がけっこうあると思う。

久保田 でも、グループホームって、タカカーンとか航也さんみたいな人がしばらく住みたいとか、一晚泊めてと言ったら、泊まってもいいんですか。

参加者 制度的には大丈夫ですよ。前例はないけれど、話の持つていきかたによっては、レッツがやってるなら負けちゃいけないということで、できるかもしれない。複数の職員と複数の利用者が一緒に暮らすというのは、ある意味グループホームで既にやっていることなんですよ。

以前、卵かけご飯事件というのが起きてね。利用者さんは、施設から出たら冷蔵庫が自由に使えるので、毎食卵かけご飯を食べたいと言う。一方でパートさんは、毎食卵かけご飯はないだろうと言って、ガチで喧嘩してね。そこで僕は板挟みになるということがあった。ここでは高林さんが間を取り持つ役割をしているのかな。

高林 まだそこまでいってないんですよね。逆にそういうことが起きてほしいな思ってるくらいで、今はまだ決められた生活に従っている感じですよ。

久保田 この1ヶ月で社は大人になったなと思いました。実は昨日、1ヶ月ぶりに実家に帰って来たんですよ。2時に迎えに来たら、社はもう帰れると思って、しがついて離れなかったんだけど、ちょうど同居人3人がいたので私が話し込みました。「ああ、そうですか」みたいな感じで、石で遊びはじめたんですよ。で、5時になったからそろそろ家に帰ろうかと思ったら、むしろ「今日もここでしょ」みたいな感じで、全然動く気配がなくて、強引に連れて帰ったくらいでした。さすがに実家が見えてきたら、安心して車を降りたんですけどね。社は3階が自分の場所だと認識しているし、すごく頑張っているなと思って、その姿を見て安心した。この感覚は娘が大学進学で家を出ていったときの感覚に近いなと思ったんです。

ササキ 先週初めて、久保田さんも、壮くんとタカカーンとヘルパーさんと一緒に、夕飯を食べたんですよ。その時も、壮くんは久保田さんの腕をつかんでいたけれど、食べ終わってのんびりしていたら、リビングの小上がりで石遊びをはじめ、全然久保田さんにこだわることがなくなって、久保田さんも1階に降りてきて仕事して帰ったということがありましたね。トークシリーズの第1回目のゲストの風雷社中の中村さんが、親に自分がいなくても子どもは大丈夫だと思わせることがいばんの親孝行だ話していたのを思い出しました。

航也 昨日の朝、社さんがテンギョウさんの部屋にふらっと入って行って、テンギョウさんが「おいおい、俺の部屋に」みたいな感じでダーっと走って行ってみたら、社さん、もふもふの毛布にくるまって最高の笑顔で楽しんでたんです。その様子を見てめちゃくちゃ嬉しそうに笑ってるテンギョウさんを見て、僕は、テンギョウさんの社さんへの愛というか、そういう関わりもあるなと気づいた。

テンギョウ あれ、よかったよね。社との友情を考えると、彼がどう思っているのか、それをどうやったら俺は知れるのかということに行き着くんだよね。想像してみてもほしいんだけど、友達の中で本当に一緒に住んでみてもいいと思える人ってどれくらいいる？そこまで開ける相手って、そんなにいないと思うんだ。今回、社と一緒に寝起きして、明け方になるとヘルパーさんが彼を起こす声が聞こえてきて、社の日常に俺がいるということがけっこう幸せで。朝起きたとき俺がいるの、社は見てるよね、ということがさ。俺はよそのだけけれど、そういうところでのつながりができていったら、いつかは自信を持って社の友達ですって言えるかなと思って。

久保田 障害がある子どもに負荷をかけすぎて、不幸にしているかもしれないと思うのが、いちばん辛いんですよね。母親だから。だけど、今回はそういう感じが本当にしないんですよね。常にも楽しそうにやってるし彼なりに自分の居場所をみんなと一緒に一生懸命つくってるというのが伝わってくるから、これは良かったなと思いました。私は、夫を3月に亡くしているんですが、もっと早くにこれをやれば、彼もそんなに苦しまないで済んだんじゃないかなとも思うんですね。だから早くにやって全然間違いないと思います。

今後は、だれか一緒にごはん食べに来てくれる人がいるといいですよね。みんなで持ち寄って鍋をする日とか決めて呼びかけたら来てもらえるかもしれないよ。それを口実に、この場を体験してもらおうとか。

高林 この場にいることでヘルパーの振る舞いを学んでしまうと、タカハシさんが言っていましたよね。ヘルパー自身が浜松市には少ないので増やしていく必要があると思いますが、ここに泊まることで意図せずにヘルパーの振る舞いが見えるのは面白いなと。ヘルパーさん自身も介助しているのを他の人に見られる機会は普段あまりなかったりするの。そういうかたちで、どんどん関わる人を増やしていけたら面白いなと思います。

タカハシ ヘルパーになりたい人だけがヘルパーになれるんじゃないって、気づいたらヘルパーになっちゃったみたいな感じでね。

GUEST PROFILE

テンギョウ・クラ ヴァガボンド、教師、コミュニケーター、ストーリーテラー

ヴァガボンド(放浪する者)を自身のライフスタイルとして、教師の活動をベースに国や地域を問わず移動と滞在を繰り返してフォトストーリーを制作している。滞在した地域の人々との交流を通じて滞在者と来訪者の関係性に揺らぎを生み出し、そこに多様なコミュニケーションの可能性を見出す。大学での講義や旅の写真展の開催、現代アーティストとのコラボレーション、さまざまな文化を紹介するイベントの企画など、異文化交流をテーマとした活動を世界各地で展開。



タカハシ 'タカカーン' セイジ だんだん施設になるセンターをつくらうとしている人

「アール・ブリュット」その創作過程、スペース「FLOAT」との出会いから、企画やパフォーマンス、障害福祉分野での創作支援等現在に繋がる活動開始。主な活動:「無職・イン・レジデンス」(2014～)、「『芸術と福祉』をレクリエーションから編み直す」、スペース「世界」(2017～)、京都芸術センターにて「京都レクリエーションセンター～施設のための試演～」発表(2019)、「注文をしなくてもいい喫茶店 すごす」開店(2019)。認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ「たけしと生活研究会」レジデンス・プログラム招聘(2019～2020)。一貫する関心は個人の表現欲求や尊厳(いる、ということ)、人が関係しあうことで発露する創意、連鎖的な創作性を様々な集いの中に見る。 <http://www.seijitakahashi.net>



佐藤 航也 千葉大学大学院

千葉大学で文化人類学を学ぶ。2014年以降スウェーデンの障害者福祉に関わる現場で短期のフィールドワークを行っている。趣味は散歩。



重度知的障害者の暮らしと制度と地域共生社会

文：久保田翠

たけしと生活研究会では、久保田壮さんのシェアハウスでの生活実験を通して、
重度知的障害者が自立生活を送るうえでの課題とその解決策について検討してきました。

この実験から以下のような課題が浮かび上がりました。

基本的な生活と文化的生活の必要性

重度の知的障害者の暮らしを支えていくには大きく分けて2つの柱があります。

一つは基本的な生活をどう支えるか。これは主に、衣・食・住といった生活のベースとなるものです。壮さんは全介助の重度知的障害者です。身辺自立、排せつ、食事生活すべてにおいて介助が必要です。ここを担うのが重度訪問介護事業が派遣するヘルパーです。

一方、人が人として尊厳のある暮らしを実現するためには衣・食・住の他に「文化的な生活」の実現が必要です。文化的な生活の実現とは、多くの人との出会いや交流によって、刺激を受け、分かち合い、共に支えあいながら生きることです。壮さんの場合、音楽や自身のパフォーマンスを通して多くの友人、知り合いを作ること、ライブや旅行の機会を得ること、日常的な外出などが考えられます。

基本的な生活と文化的な生活の2つがそろって初めて当事者たちの生活の質(QOL)は向上します。すべての国民は文化的な生活を享受する権利があると憲法には謳われています。文化的な生活は基本的な生活の上に成り立つものと思われていますが、そうではありません。基本的な生活の中に文化的生活を組み込んでいくことはできるのです。そうしたことを知る機会が福祉関係者にないことは大きな問題だと感じています。今後、ケアの中にある豊かさや楽しさ、おもしろさを発見していく視点を福祉に取り入れていくことが求められています。

重度訪問介護が

重度知的障害者用になっていない

壮さんがシェアハウスでの自立生活を送るために、本事業では重

度訪問介護という障害福祉サービスを利用しました。重度訪問介護とは長時間ヘルパーが介助して重度障害者の生活を支える制度です。壮さんは、障害支援区分6、強度行動障害、家族支援の困難さ(実質母一人しか介助者がいない)、実家を出て法人が用意したシェアハウスで生活する、生活を支えるヘルパー派遣事業所があるといった条件によって、浜松市では重度知的障害者で初めて573時間もの支給が決定しました。そして、2019年10月から3つの事業所のサポートによって自立生活が始まりました。

全国あるいは浜松市でも重度訪問介護の利用者の多くは身体障害者です。1970年代にはじまった障害者運動を背景に2006年に制度化され、主に身体障害者が自己決定しながら生活することを基本として運用されてきた背景があります。当事者である障害者が主体となって、さまざまな指示をヘルパーに伝えます。しかし重度知的障害者の場合、ほとんど発語がなく、すべてのことにおいて意思の決定は不明瞭です。したがって、経験と観察をもとに支援者が支援内容を想像することが求められます。また、多くのヘルパーが関わる現場において支援内容の伝達は必須で、その方法は大きな課題です。しかし、身体障害者を中心として形成されてきたこの制度においては、ヘルパーにそうしたスキルがないのが実情です。意思を本人が決めることに重きを置いてきた支援のスキルが重度知的障害者支援においては全く活かされないといった状況が生まれています。重度知的障害者が使いやすいように考えていかなければいけないと思います。

当事者のQOLを担うチームとシステム

現在、壮さんの生活は6ヶ月過ぎても基本的な生活すらまなら

ない状況です。その大きな理由は、3事業所同士の連携体制がない状況の中で、壮さんの支援に一貫性がなく、多くの混乱を招く結果になっているためです。これらを解決していくためには個々のヘルパーが持つ情報を共有できる体制が必要です。明確な意思が確認できない重度知的障害者のQOLを、一人の支援者ではなく、複数の支援者、さらには本人を知る友人、家族などがチームとなり担っていく必要があります。そしてこのチームをまとめていく人材も必要です。

また、上述のように、重度知的障害者の基本的な生活の支援だけでなく文化的な生活を支える支援は、福祉の制度設計の中にあまり組み込まれていません。もちろん、重度知的障害者たちは、全く文化的な生活を送っていないわけではありません。通所施設以外でもさまざまな外出をヘルパーとともにしている事例は多くあります。しかし、それらをコーディネートしているのは主に当事者の家族で、家族が重度知的障害者の文化的生活の要を担っていると言えます。今後は、家族が担ってきたコーディネート機能を、複数の支援者、関係者、友人等で担い、さらに不明瞭な重度知的障害者の意思決定を複数人で協議し探っていくことが求められています。

障害者の暮らし方の選択肢を増やす

現在、重度知的障害者の生活は、家族、入所施設、グループホームの3つが主な選択肢です。その他に重度障害者等包括支援がありますが、全国でも事例が少なくほとんど使われていません。今回のたけしと生活研究会の試みの目的は、この3択以外の多様な選択肢について考察することです。

今回は、重度訪問介護を使ってシェアハウスで生活する実験を行いました。他にもさまざまな場所や相手との生活が可能となります。また、外出や買い物など自宅以外での活動においても、一体的に支援を受けることができるので、個人の嗜好に合わせて生活を組み立てることも可能です。しかし、現在、重度訪問介護の支給決定は障害者が住む市町にその裁量があります。その支給がおりるか、時間数や支給決定の条件などは市区町村にゆだねられており、その判断に伴って生活の選択肢も左右されることとなります。既存の制度に当てはめて障害者たちの生活を考えるのではなく、それぞれにどのような生活が合うのか、ふさわしいのかといった理想を掲げ、どの制度で実現できるのか、また現行制度になればどんなサービス

が必要なのかといったことも研究していくことが必要です。

重度訪問介護事業所の

圧倒的な不足と支援者の育成

利用者を支援する支援者は圧倒的に不足しています。事業者は人材確保に努力していますが、なかなか人が集まらないのが実情です。浜松市の重度訪問介護事業所のほとんどは、居宅介護、移動支援等を行う事業所が兼務していますが、人材不足によって長時間の支援者の派遣ができない場合が多く、実際には重度訪問介護の受け入れは難しくなっています。人材不足の要因の一つとして、支援者が集まって、利用者の生活の質の向上について考える機会が少ないことが考えられます。そのような場を持つことで、支援者のスキルややりがいにつながっていくのではないのでしょうか。

また、福祉業界に新たな人材を呼び込むためには、支援者が利用者を支えながらお互いが幸せになれる循環型の関係づくりが大切です。重度知的障害者の細かなニュアンスをくみ取り、「ともに楽しむ」気持ちと振る舞いが必要です。長時間共に過ごす支援者が「管理者」ではなく、お互いに居心地よく過ごせる「パートナー」のような関係になることが理想だと考えています。そのためには、当事者を核とした研修や、支援の情報や悩みを共有し相談できるプラットフォームが必要だと思います。

第三者の存在と

重度知的障害者の暮らしを外に開くこと

今回の実験では、一人暮らしではなく「集まって暮らす」ことを目指しました。そして、当事者と支援者の一対一の関係性だけでなく、ゲストやシェアメイト、来訪者といった「第三者」との関係性のある住まい方を実験してみました。

第三者は、閉鎖的になりがちな福祉の支援に風穴を開ける役割がありました。当事者にとっても支援者にとっても、この「第三者」の存在は、関係性に幅を持たせ、より自由な雰囲気とのつながるといった効果がありました。また、第三者と支援者との交流、ゲスト同士の交流などは、重度知的障害者の生活に生まれがちな閉塞感を回避するひとつの装置として有効であることがわかりました。

重度知的障害者の生活の質を高めるためには、支援者ではなく友人、知り合いをどれだけ増やしていくかが要だと考えていま

す。シェアメイトやゲストは、ここに宿泊することで重度障害者個人のことを知り、交流が生まれるきっかけにもなっています。毎日の生活の中で、近隣への散歩、外出、買い物等を通して地域の人たちと顔見知りとなり、交流する可能性もあります。このように、重度知的障害者の生活の質の向上において、どう社会に開いていくのかは重要なポイントだと考えます。

■ 地域共生社会と重度知的障害者

少子高齢化や格差の拡大などさまざまな課題を抱えている社会の中で、今後、障害者だけではなく、高齢者、子どもなどさまざまな立場の人たちが地域で支えあいながら暮らしていく地域共生社会の実現が求められています。今回の事業は、重度知的障害者が障害のない人たちとともに暮らし、また日常生活で街にかかわることを通して、社会的に不利益な状況にある人たちが、どのように暮らし、地域に関わっていくのかを考察するヒントになると考えています。今年度の実験では地域とのかかわりは不十分でしたが、今後、チャレンジをしていきたいと思います。同時に、重度知的障害者が地域共生社会の担い手として、多様な人たちと交流し、地域をどう変えていくのかを検証していきたいと考えています。

Recapitation

Living, systems and coexisting communities of persons with severe intellectual disabilities

Witten by Midori Kubota (Board Chairperson of Approved Specified Non Profit Organization Creative Support Let's)

The Takeshi Lifestyle Study Project has been examining the issues and solutions for people with severe intellectual disabilities to live independently in a shared apartment through life experiments with Takeshi Kubota. The following issues emerged from this experiment.

■ Necessity for basic and cultural life

There are two main pillars to support the lives of people with severe intellectual disabilities. First of all, it is how to support basic life, such as clothing, food and housing. Takeshi is a person with a severe intellectual disability who requires full assistance in all aspects of self-reliance, excretion and eating. People with severe intellectual

disabilities are supported by helpers from specialized home care providers.

On the other hand, in order to have a dignified life as a person, it is necessary to provide a "cultural life" in addition to the basic life. Through encounters and exchanges with various people, it is possible to have a stimulating cultural life through sharing and with the support of each others. In Takeshi's case, cultural life is the possibility to make many friends and acquaintances through music and his own performances, concerts, travel opportunities, and going out on a daily basis.

The quality of life (QOL) of persons with disabilities will be improved only when those two pillars, 'basic life' and 'cultural life' are combined. The Constitution of Japan states that every citizen has the right to a cultural life. Cultural life is thought to be based on basic life, but it is not. Cultural life can be incorporated into basic life. I feel that it is a big problem that welfare officials do not have the opportunity to be aware of this. From now on, it is necessary to integrate this new perspective into welfare to discover the richness, enjoyment, and interest in providing care.

■ Home Care for Severely Disabled People is not designed for the persons with intellectual disabilities

In this project, we employed a welfare service called Home Care for Severely Disabled People to start Takeshi's independent life in the shared apartment. Home Care for Severely Disabled People is a system that supports the lives of severely disabled people and provides helpers with long-hours contracts. For the first time in Hamamatsu City, 573 hours of help for severely intellectually disabled persons, was provided to Takeshi, considering his situation: he is a level 6 disabled person, with strong behavioral disorder and low family support (only one member of his family, his mother, is a caregiver); and on the condition of leaving his home for a shared apartment prepared by the organization, and the availability of helper dispatch businesses. From October 2019, his independent life began with the support of the three care providers.

Most of users of Home Care for Severely Disabled People have physical disabilities. It was regulated in 2006, following the disability rights movement that began in the 1970s, that physically disabled people have self-determination and the Home Care for Severely Disabled People has been operated mostly on this basis. A person with disabilities is responsible for giving instructions to the helpers. However, people with severe intellectual disabilities have very limited oral expression and decision making is usually ambiguous. Therefore, it is necessary for supporters to create guided content based on experience and observation. In addition, communication about guided contents is essential in the case where a lot of helpers are involved, although the method hasn't been developed yet. However, in the system that has formed around physically disabled persons, helpers do not have such skills to communicate with each other. Support skills that have been focused on decisions made by the disabled persons themselves are not adapted in supporting severely intellectually disabled persons. We have to think about these problems and make changes.

■ Teams and system in charge of the QOL of the persons with disabilities

At the moment, Takeshi's life hasn't reached the standard level of

basic life, even though it has been almost six months since he started to live independently. The main reason is that there is no coordination between the three care providing companies. The support of Takeshi is inconsistent and results in a lot of confusion. In order to solve these problems, a hub of supporters is required to aggregate information and communicate with individual supporters. The system needs to be created so that everyone who knows him can work as a team, including multiple supporters, friends and family members, in order to improve the QOL of persons with severe intellectual disabilities who are unable to express their intentions clearly. Most importantly, we need talent in order to coordinate this team.

Also, as it was mentioned above, support for a cultural life as well as support for the basic life of persons with severe intellectual disabilities is not very well designed into the welfare system. Of course, severely intellectually disabled persons have a right to a cultural life. It is mainly the family who coordinates outings with helpers outside the daycare facilities. The family has played a key role in the cultural activities of people with severe intellectual disabilities. In the future, it will be necessary that co-workers, stakeholders and friends take over the roles that have been fulfilled by the family, and to discuss and explore how the persons with severe intellectual disabilities can make decisions despite their difficulty of expression.

■ Increase the lifestyle options for people with disabilities

Currently, there are three main options for people with severe intellectual disabilities: living with family, living in residential facilities, and living in group homes. In addition, while comprehensive support exists for people with severe disabilities, it is hardly used. The purpose of Takeshi Lifestyle Study Project is to consider other options beside those three options.

This time, we conducted an experiment of living in a shared apartment using the social welfare service, Home Care for Severely Disabled. The service enables living in various places and with different partners. In addition, the persons with disabilities can receive integrated support for activities outside home, such as outing and shopping, so they can organize their life according to their personal preferences. However, at present, the decision for benefiting of Home Care for Severely Disabled People is at the discretion of the municipalities where the persons with disabilities live. The conditions for determining the number of required support hours to be paid will be determined by the municipality depending, among other criteria, on the financial cost. This decision will affect the life options offered to the disabled persons. We don't strictly have to follow the existing system. It is important to set idealistic goals and to research what kind of services and new systems will be required to improve the quality of life of the persons with disabilities and to decide the type of life that will be appropriate for each individual.

■ Overwhelming shortage of Home Care for Severely Disabled People providers and development of supporters

The number of supporters and helpers available to assist disabled people is extremely limited. Business providers strive to secure human resources, but the fact is that it is difficult. Most of the providers in Hamamatsu City are also engaged in home care and mobility support. The lack of human resources often make it impossible to dispatch supporters for long hours. It is undeniable that the lack of human resources exists because the supporters have

difficulties finding the time to engage with their clients or having the opportunity to consider improving their quality of life. They need the opportunity to develop their skills and gain satisfaction through their work. In order to attract new staff members to the welfare industry, it is important to create a strong relationship between the supporters and recipient so that both parties can help each other and make themselves happier. It is necessary for supporters to guess intentions of clients with severe intellectual disabilities so that both parties enjoy their time together. Ideally, the long-term supporter should not be seen as an "administrator" in the relationship. Rather the relationship should be seen as a "partnership" so that both the supporter and the client are comfortable with each other. Therefore, I think it is necessary to create a platform where supporters can share information and challenges in consultation with each other. This platform should also include training and research that centers on the persons with disabilities.

■ The existence of third parties and opening the lives of people with severe intellectual disabilities

During this experiment, we aimed at living together instead of living alone. We experimented not only with the one-to-one relationship between the disabled person and the supporter, but also with other guests, sharemates, and visitors.

The third parties played a role as they "broke through" the welfare support system, a system that tends to shut out general society. For both the person with disabilities and the supporters, the presence of this "third party" opened the possibilities for a better relationship and created a more open-minded support system. In addition, it was found that interaction between third parties and supporters are effective to ease the barrier that tends to occur in the lives of people with severe intellectual disabilities .

To improve the quality of life of people with severe intellectual disabilities , we believe it is important to increase the number of friends and acquaintances in their life, not simply add more supporters. Sharemates and guests who stay here have an opportunity to get to know individuals with severe disabilities and interact with them. It is possible that the person with disabilities might be able to meet and interact with local people when they take a walk, go on outings, shopping, etc. in the neighborhood. I think it is important to examine how we can open the lives of the disabled people to society. This openness will improve the quality of life of the persons with severe intellectual disabilities .

■ Co-existing society and people with severe intellectual disabilities

We live in a society with various issues such as a declining birthrate and widening aging disparities. In the future it is inevitable that communities will be constituted of very different individuals, such as the elderly, children, non-disabled and disabled persons alike, that can support each other. In this project, people with severe intellectual disabilities live with people without disabilities. Through their daily life in the town, we could find ways for them to live and interact in the community. This year, we couldn't develop much relationships in the community, but we will keep challenging ourselves from now on. At the same time, we would like to examine how a person with severe intellectual disabilities can play an important role in the community coexistence through interaction with a variety of people and eventually change the local society.

「たけしと生活研究会」 事業実施データ

* 場所: たけし文化センター連尺町

シェアハウスでの生活実験 *

[期間] 2019年8月～2020年3月

[宿泊体験者数・日数] 4名、述べ17日

[来客・ゲストハウス滞在者数] 65名

久保田壮さん支援会議

[日時] 2019年5月22日(水)、8月6日(火)、9月19日(木)、10月3日(木)、10月17日(木)、11月7日(木)、12月26日(木)、
2020年1月23日(木)、2月18日(火)、3月18日(水)

[出席者] 壮さん母親、プランセンターひくま、ぴあねっと浜松、アクロス・ザ・タイム、土屋訪問介護、アルス・ノヴァ

高橋舞さん支援会議

[日時] 2019年11月5日(火)、12月20日(金)

[出席者] 舞さん母親、相談支援事業所、居宅介護事業所(2事業所)、アルス・ノヴァ

太田燎さん支援会議

[日時] 2020年1月27日(月)

[出席者] 燎さん母親、相談支援事業所、アルス・ノヴァ

シェアハウス保護者説明会

[日時] ①2019年11月6日(水)18:00～20:00

②11月9日(土)14:00～16:00

③11月9日(土)18:00～20:00

[出席者数] ①10名、②9名、③4名

トークシリーズ *

#1 風雷社中の中村さんに聞いてみる!

重度知的障害のある人の自立生活(ケア付き一人暮らし)!?

—「Transit Yard げんちゃんの記録」上映会&トークin浜松—

[日時] 2019年7月22日(月)19:00～21:00

[ゲスト] 中村和利(NPO法人風雷社中理事長、WEBマガジンIKETAMA主宰)

[出席者数] 34名

#2 中田一会さんに聞いてみる!

「家を継ぎ接ぐ」で考えたこと

[日時] 2019年8月8日(木)18:30～20:30

[ゲスト] 中田一会

[出席者数] 36名 [映像配信視聴] 100回

#3 相澤久美さんに聞いてみる!

家族という境界を揺るがす住まいと生活

第1部

[日時] 2019年9月20日(金)18:30～20:30

[ゲスト] 相澤久美

[出席者数] 8名 [映像配信視聴] 83回

第2部

[日時] 2019年9月21日(土)13:30～15:30

[ゲスト] 相澤久美、ロビンス小依

[出席者数] 6名 [映像配信視聴] 29回

#4 アサダワタルさんに聞いてみる!

生活と表現とシェア

[日時] 2019年10月2日(水)18:30～20:30

[ゲスト] アサダワタル

[出席者数] 15名 [映像配信視聴] 168回

#5 テンギョウ・クラさんに聞いてみる!

生活とか自立とか友達とか

[日時] 2019年11月5日(火)18:30～20:30

[ゲスト] テンギョウ・クラ、タカハシ 'タカカーン' セイジ、佐藤航也

[出席者数] 13名 [映像配信視聴] 407回

「たけしと生活研究会」アドバイザーボード *

第一回

[日時] 2019年10月22日(火)17:00～20:00

第二回

[日時] 2020年3月14日(土)11:00～14:00

